□モスクワに「3大陸代表(女子)」確保
□アジア選手権と「予選」は別建て
――渡辺和美IHF理事に聞く――

オリンピックへの〃定着〃、加盟国の飛躍的な伸び、アジア球界の活発化――激しい国際ハンドボール界の動きの中で、日本の渡辺和美氏が、IHF（国際ハンドボール連盟）理事に再選〜任期4年〜された。＝本誌147号既報

IHFの今後の方向、AHF（アジア連盟）との関連などを同理事に聞いてみた。

渡辺和美ＩＨＦ理事

――オリンピックへの復活で、国際ハンドボール界は、ここ4〜5年、大きな変ぼうを遂げていると思うが……。

渡辺ＩＨＦ理事　私が、ＩＨＦ筋に初めて接触したのは10年ほど前だが、その時から、ヨーロッパのスポーツとして満足しているだけではダメだと云いつづけて来た。ミュンヘン（昭47）を機会にようやく、そうした主張が聞き容れられ、世界的なスポーツへ躍進しようというムードがＩＨＦ内に育った。我が意を得た感じだ。アメリカ大陸や、アフリカ大陸代表の協力に負うところも大きい。

――既に加盟国がマキシマムに近いヨーロッパに比べ、いわゆる〃3大陸〃は、ますます成長し、今後は大勢力になると思われる。ＩＨＦ内の認識はどうか。

渡辺理事　充分、事態を承知している。世界選手権をグループ（ランク）制にした時Ａグループに各大陸の枠を設けたのや、オリンピック女子で「3大陸代表」の道を開いたのはその現れだ。アメリカ大陸代表のＰ・ベーニング氏（アメリカ）は、3大陸選出理事を副会長待遇にすべきだとまで発言している。また、理事会決議を総会で押し通せなくなっている例も出てきた。

――モスクワオリンピック（昭55）でも、「アジア代表」は男女とも確保されるか。

渡辺理事　当然である。ただし女子は6ケ国の場合、モントリオールと同じように3大陸で一つということになろう。

――そうした動きにもかかわらず、ＡＨＦ（アジア連盟）結成にあたってみせたように、ＩＨＦはヨーロッパ以外の情勢把握が完全とは云えないようだが

渡辺理事　アジアを極東と近東に分けようとして失敗したことをＩＨＦは反省している。

――全アジアのバックアップをうけた渡辺理事の責任は、4年前の初選出時とは比べものにならぬほど重いが

渡辺理事　この4年間は、ＩＨＦの動きをアジア各国に理解してもらうことを第一に心がけたが、今後は、アジアの動静を積極的にリポートする。ＩＨＦも、アジアに関しては私に委せる体制を改めて確認している。

――ＡＨＦとは、どう関連していくか。

渡辺理事　ＡＨＦはアル・ザバハ会長（クウェート）が病気療養中で事務が停滞しているようだが、ＩＨＦの指示する五つの大陸コミッション（競技・審判と規則・コーチング・医事・普及）を早急につくるよう働きかけたい。

アジアのレフェリーの国際進出もこのルートを通ることになろう。この五つのコミッションのアジア代表は、ＩＨＦの各コミッションのチェアマンと充分な連絡をとれるよう、すでに手ハズは整っている。

問題は、〃若いアジア〃で、どれだけの人材が揃うかだ。

日本協会にも、語学力のある人材の推せんを依頼するつもりだが名誉職的な人選は困る。

――来年の第1回アジア選手権は開かれるのか。

渡辺理事　私のところへの連絡では、3月20日頃から12日間、クウェートで男子だけ行うとされている。

――この大会は、再来年の第9回世界選手権（Ａグループ）のアジア予選にもなるのか。

渡辺理事　兼ねることはできない。アジア予選は私が別個にオーガナイズする。

――予選のスケジュールは

渡辺理事　男子は来年秋、女子は53年5月までに終りたい。

――「中国問題」は、その後、発展していないようだが。

渡辺理事　ＩＨＦとして中国加盟は大賛成だが、台湾と同席はできぬという中国側の姿勢は認められない。

――なぜか。

渡辺理事　いちどファミリーに加えた台湾を、正当な理由なく〃追放〃することなどできない。

――中国招へい、台湾〃追放〃の動議を提出する国はないのか。

渡辺理事　今のところ、まったくない。

――ところで、昨年の人事で、日本協会のポスト（注・それまでは副会長）からはなれたが。

渡辺理事　田村日本協会会長に「ニュートラルな立場をとることがある」と伝えたのが、副会長であっては拙いというふうに受けとられたのだろう。

もっともＩＨＦ理事で母国の会長や副会長をつとめている人は一人もいないが。

――ＩＨＦ理事の立場で日本球界に望むことは

渡辺理事　すべてに国際性をもつことだ。ＩＨＦ筋では、日本協会を、いささかカミカゼ的な協会だとみている。

冒頭述べたように、ハンドボールは、グローバルなスポーツとして成長している。日本が、すべての面で世界へ進出する絶好のチャンスだ。

日本協会が国際的視野に立った施策を積極化するよう期待したい

（12月9日・東京で）

（渡辺理事略歴）52才、早大出、大崎電気工業社長
日本協会顧問、東京協会々長

湧永薬品、大同特殊鋼の野望絶つ

湧永薬品（広島）が，常勝・大同特殊鋼（愛知）の野望を絶って感激の優勝（4年ぶり2度目）を飾れば，女子は立石電機（熊本）が，宿敵・日本ビクター（茨城）を延長の末破り，劇的な初優勝—。

6年ぶりにトーナメント法式を採用した第28回全日本総合選手権は，12月8日から12日まで東京体育館に男子24，女子16チームが参加して行われ，緊迫した試合がつづいた。

（観衆・第1日600，第2日750，第3日700，第4日1800，第5日2400）

女子は立石電機が初・全日本総合選手権

学生勢、元気な攻守

男子

▽1回戦

早大（学連⑤ 東京）33（17—7 16—8）15 日本発条（実連 神奈川）

名城大（学連④ 愛知）24（16—11 8—7）18 茨城教員（教連② 茨城）

神戸製鋼（実連 兵庫）31（12—6 19—9）15 自衛隊勝田（自連②・茨城）

東京教大（学連② 東京）22（11—6 11—6）12 日大（東京）

佐賀教員（教連④ 佐賀）22（12—10 10—8）18 トヨタ車体（実連・愛知）

京都産大（学連③ 京都）21（12—7 9—9）16 本田爽風会（全国社会人西地区・三重）

稲球会（全国社会人東地区・東京）29（16—10 13—4）14 スワロー兵庫（教連③・兵庫）

中大（学連① 東京）38（18—7 20—5）12 新日鉄名古屋（実連・愛知）

○……学生勢の元気が目についた

中大、早大は、力（パワー）ばかりか、巧味でも実業団の二番手を上廻り、文句のない試合ぶりだった。

名城大も、前半こそ、茨城教員のペースに誘われたが、後半になるとガラリと変わり、スピードあふれた攻撃をみせ、左腕・鈴木康のジャンプ、ポストプレーなどで波にのった。

京産大は、いきなり1—5とリードされる苦しいスタート、後半15分まで、ピタリと爽風会に食いつかれたが、終盤、どうにかリズムを取り戻した。長谷川、三浦を軸とした爽風会の健斗をここは賞したい。神戸製鋼は上り坂らしいチーム力で危気なかった。

接戦が予想された佐賀教員×トヨタは、ともに守りに甘さを残し妙味のない射ち合いに終始、前半20分すぎ先行した佐賀が、後半、速攻で加点、押し切った。

クラブ同士の稲球会×スワローは、静かな〝OB戦〟という感じで進んだが、スワローにかつての迫力がなく、稲球会は14点をたたき出した菊池、山田克のコンビとGK北島の堅守で勝ちあがった。

名城大、三陽商会破る
京産大も日新に逆転勝ち

▽2回戦

大阪イーグルス（NHL⑥・大阪）21（13—7 8—8）15 東京教大

本田技研鈴鹿（NHL③・三重）37（21—7 16—5）12 神戸製鋼

京都産大 17（10—6 7—9）15 日新製鋼呉（NHL⑦・広島）

湧永薬品（NHL②・広島）34（21—7 13—5）12 佐賀教員

中大 21（12—9 9—8）17 大崎電気（NHL④・埼玉）

三景（NHL⑤・東京）26（16—10 10—8）18 稲球会

大同特殊鋼（NHL①・愛知）32（17—7 15—6）13 早大

名城大 10（12—9 7—9）18 三陽商会（NHL⑧・東京）

○……日本リーグ勢の登場で締まった内容となり、挑戦した学生5チームのうち中大、名城大、京産大が勝利を握って、スタンドを沸かせた。

中大×大崎は予想どおりのせり合いから後半15分14—14、そのあと大崎の攻めが横へ流れ出したのに対し、中大はタテへのショートパスをよく通し、長野、関らが果敢に倒れこんでポイント、20分19—14とリードを奪った。

守っても中大は、昨年まで主将だった大熊を密着マークする味（へあじ）な策戦が当たった。

大崎は先行しても、すぐ追いつかれる粘りのなさで、番狂せとはうつらぬ負けかただった。

京産大×日新は、後半13分11—13とされた日新が脇若の好判断と徳田のシャープなプレーで22分15—13と一気に逆転、ペースを握ったかにみえた。しかし、そのあと3回の好機を京産大GK松村につぶされたのが命とり。京産大は25分15—15に追いつき、28分生駒で逆転92分30秒西田がダメを押した。

名城×三陽はむしろ三陽が押し気味だったが三陽は実業団の面目をかけてベテラン近森の好リードで優勢に試合を進め、前半は9—7。

しかし、後半になると名城大は前日同よう奮起し、6分に同点にした後は一歩も譲らぬ好内容。

終了まぎわに名城大・高橋の決勝ゴールで劇的な幕切れとなった三陽は17分16—14としながら、そのあと約8分無得点だったのがあとで響いた。

好試合を期待されたイーグルス×教大は、激しいせりあいとなり後半10分11—11、ここでイーグルス・高橋の巧さが出た。速攻、ポストで連続3点、さらにPTを誘って福井が決め、あっという間に4点差をつけた。教大も奮起して22分13—15と追いあげたが、イーグルスは相手のミスをついて3点連取、勝負を決めた。教大は前半の好機を相手GK本田に捌かれたのが痛い。

〝仲間〟の苦戦をよそに大同、湧永、本田技のリーグ3強は楽勝三景も稲球会と派手に射ち合ったが、後半10分19—9と決めるところは決めた。

—3と食いついた。

しかし、地力に優る大同は、じわじわと攻め立て15分9—4、こうなると県リーグなどで相手の強さを身近かにしているだけに、名城は気力がなくなる。動きこそ変わらなかったものの、パスミスなどが目立つようになり、点差がついても、大事に仕掛けてくる大同の猛攻を浴びて、後半10分には22—8と開かれた。

しかし、初出場ながらベスト8に食いこんだ名城大の健斗は"一陣の新風"と云ってよく、その試合ぶりを大いにたたえたい（杉山）

名城大、歯が立たず
本田技、イーグルス制す

▽準々決勝

大同特殊鋼 34（18—5, 16—7）12 名城大

【名城】	選手	得
GK	松井	0
GK	木村	0
FP	高橋	5
FP	山下	0
FP	谷元	1
FP	江崎	0
FP	鈴木輝	4
FP	鈴木康	1
FP	安藤	1
FP	瀬島	0
FP	西浜	0
FP	平山	0

【大同】	選手	得
GK	柳川兄	0
GK	倉谷	0
FP	藤井	7
FP	柳川弟	8
FP	松原	6
FP	花輪	5
FP	北村	0
FP	中本	0
FP	大原	4
FP	清崎	1
FP	野田	3
FP	中井	0

34（4）PT（0）12

（審・佐分、大塚）

○……名城は元気なスタート、俊敏・高橋の連続3ゴールで5分3

本田技研 26（14—5, 12—3）8 大阪イーグルス

【大阪】	選手	得
GK	本田	0
GK	広川	0
FP	高橋	2
FP	池本	0
FP	足羽	0
FP	安達	1
FP	橋本	2
FP	河原崎	2
FP	早川	0
FP	福井	1
FP	北岡	0
FP	北居	0

【本田】	選手	得
GK	柴田	0
GK	細野	0
FP	田上	2
FP	佐藤	4
FP	喜井	4
FP	柳	2
FP	金子	7
FP	矢野	7
FP	高木	0
FP	川上	0
FP	嶋林	0
FP	豊岡	0

26（2）PT（0）8

（審・岡前、佐野）

○……速攻とセットプレーを巧妙に使い分けた本田技が着々と得点を重ね18分7—0、大阪は速攻が出ず、セットでも大柄な相手守備網を切り抜けることができなかった。

後半になり、大阪は速いボール廻しから好機をつかんだが相手GK柴田に阻まれて点差は詰まらずなかばすぎからは動きも鈍くなった。

京産大も完敗

○……2—0とされた京産大は4分北野が得点、意気あがるかとみえたが、生駒がマークされて、あまり動けず、早目々々とつぶしてくる湧永ディフェンスに20分近く追加点を阻まれ、善戦どころでは

湧永薬品 26（14—6, 12—2）8 京都産大

【京産】	選手	得
GK	松村	0
GK	大西	0
FP	西田	0
FP	生駒	4
FP	北野	3
FP	木村	0
FP	日比	0
FP	藤本	1
FP	松井	0
FP	松山	0
FP	田中	0
FP	林	0

【湧永】	選手	得
GK	福井	0
GK	今井	0
FP	津川	2
FP	木野	3
FP	穂積	2
FP	高橋	2
FP	藤本	2
FP	松本	5
FP	山本	8
FP	戸田兄	0
FP	戸田弟	2
FP	森	0

26（2）PT（2）8

（審・斉藤、千野）

なかった。

湧永は、イージーシュートをはずすなど気になる場面もあったがまずは攻守とも無難で危気なかった。

早々と勝負の行方が決まってしまったせいか、盛りあがりに欠けた。（佐野和夫）

三景、延長で中大破る

三景 21（11—9, 6—8 : 2—0, 2—0）17 中大

【中大】	選手	得
GK	小松	0
GK	板橋	0
FP	蒲生	6
FP	関	1
FP	金沢	4
FP	西窪	1
FP	坪子	2
FP	長野	3
FP	中村	0
FP	大林	0
FP	佐藤	0
FP	大久保	0

【三景】	選手	得
GK	佐藤	0
GK	小林	0
FP	内藤	4
FP	村田	6
FP	山村	2
FP	川島	4
FP	中馬	3
FP	加藤	2
FP	飯島	0
FP	武内	0
FP	高梨	0

21（3）PT（2）17

（審・幸田、狩野）

○……三景というチームは不思議だ。延長10分間にみせた攻守は完ぺき、もしこのプレーが後半せめて5分間でも出ていれば、10分よ

歴代ナショナルチャンピオンチーム

	【男子】	【女子】
昭12	大塚ク（東京）	……
昭13	日体（東京）	……
昭15	日体（東京）	倉敷高女（岡山）
昭17	日体ク（東京）	倉敷高女（岡山）
	～以上 戦前の全日本選手権～	
①昭25. 2	日体桜（東京）	愛知ク（愛知）
②昭25.11	スワロー松（東京）	全山梨（山梨）
③昭26	スワロー（東京）	芙蓉ク（東京）
④昭27	セントポールA（東京）	（休会）
⑤昭28	全日体大（東京）	全静岡城北高（静岡）
⑥昭28	全日体大（東京）	全静岡城北高（静岡）
⑦昭30	西日本日OB体（福岡）	水海道二高（茨城）
⑧昭31	全日体大（東京）	半田高（愛知）
		～以上11人制～
⑨昭32	全日体大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑩昭33	全日体大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑪昭34	芝浦工大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑫昭35	芝浦工大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑬昭36	芝浦工大（東京）	愛知紡績（愛知）
⑭昭37	大崎電気（東京）	愛知紡績（愛知）
	～以上11人制～	
⑮昭38	立教大（東京）	大洋デパート（熊本）
⑯昭39	大崎電気（埼玉）	大崎電気（埼玉）
⑰昭40	大崎電気（埼玉）	大洋デパート（熊本）
⑱昭41	全立教（東京）	大崎電気（埼玉）
⑲昭42	大崎電気（埼玉）	田村紡績（三重）
⑳昭43	全立教（東京）	大洋デパート（熊本）
㉑昭44	全立教（東京）	大洋デパート（熊本）
㉒昭45	大崎電気（埼玉）	大洋デパート（熊本）
㉓昭46	大崎電気（埼玉）	日本ビクター（茨城）
㉔昭47	湧永薬品（大阪）	東京重機工業（東京）
㉕昭48	大同製鋼（愛知）	日本ビクター（茨城）
㉖昭49	大同製鋼（愛知）	東京重機工業（東京）
㉗昭50	大同製鋼（愛知）	日本ビクター（茨城）
㉘昭51	湧永薬品（広島）	立石電機（熊本）

「ハンドボール」52年1月号（第149号）目次

【表紙写真】全日総合男子決勝・湧永×大同戦。湧永・の攻撃陣の斗志にあふれるプレー。（12月12日・東京体育館）撮影・山田真市

けいに戦わずにすんだろう。

互角の前半から三景は後半5分までに2点をあげ13−9としたのだが、そのあとショートパス攻法を読まれて中大の逆襲をくい15分タイ（13−13）にされた。

しかし、そのあと中馬、川島らでたえず先行、残り4分17−15としたのだが、FTを蒲生に集める中大の策にはまって、残り4秒同点とされた。

誰もがこれで勢いづいた中大有利とみたのだが、三景は「これから第2試合」とばかりに思い切ったスパート。村田の速射、川島の巧技で先手をとり、守っても早い出足をみせて中大にとびこませず〝完勝〟した。

中大は前半、相手のスローペースに乗せられてしまったことと、後半、9−13から一気に追いつきながら、先行まではできなかったのが、惜しい星を落とす因だった。

面白さという点では、近来にない試合といえる。（杉山）

魔の一瞬、本田崩れる

▽準決勝

湧永薬品 16（5−7, 11−3）10 本田技研鈴鹿

○……一瞬だった。本田の小さなパスが、後をむいていた味方選手の肩に当たってボールが落ちた。出足のよい湧永・松本が拾い快走ゴールに突き刺す。10−9。後半19分である。

位置	【本田】	得	【湧永】	得
GK	柴田	0	福井	0
GK	細野	0	今井	0
FP	田上	2	津川	3
FP	佐藤	3	木野	3
FP	喜井	0	穂積	3
FP	柳	4	松本	3
FP	金子	0	山本	3
FP	矢野	1	戸田弟	1
FP	豊岡	0	森	0
FP	高木	0	高橋	0
FP	川上	0	藤本	0
FP	嶋林	0	戸田兄	0
	PT	（0）10	PT	16（1）

（審・佐野、岡前）

この一プレーで湧永は波にのり連続6得点。

立ち上りの0−3をはね返し、前半なかばから、完全に自分のペースで運んでいた本田にとっては悔やみ切れないプレーだろうが、この1点は、けして致命傷ではなかったハズだ。そのあとの7人の〝崩れ〟が問題である。

射つたびにGK柴田の妙技に封じられながら焦ることなく、5−8の劣勢から追いあげた湧永の沈着な試合ぶりと対照的に、本田はまたしても大型なるが故のもろさをみせて、波乱を期待していたファンを失望させてしまった。（杉山）

大同、後半に地力示す

大同特殊鋼 23（8−6, 15−10）16 三景

○……前日延長戦の末、中大に勝ち調子がでてきた三景は、風邪で欠場していた佐々木が復帰し、やる気十分。試合内容が注目された

前半は、大同が花輪らで点をとれば、三景は佐々本、川島らで反撃、大同が8−6でリードした。

位置	【三景】	得	【大同】	得
GK	佐藤	0	柳川兄	0
GK	小林	0	倉谷	0
FP	佐々木	4	野田	1
FP	山村	1	藤中	8
FP	川島	5	柳川弟	3
FP	村田	5	中井	1
FP	内藤	1	松原	2
FP	中馬	0	花輪	6
FP	飯島	0	大原	0
FP	武内	0	北村	1
FP	高梨	0	中本	1
FP	加藤	0	清崎	0
	PT	（1）16	PT	23（3）

（審・千野、斉藤）

後半になると、大同は藤中が得意のジャンプシュートをよく決め、オリンピック組、若手らもむらなく得点した。

三景も大同によく食い下がり、村田らで追いかけたが、今一歩及ばなかった。

（青木敬子・本誌編集委員）

大同、反撃の気力失う

▽決勝

湧永薬品 17（8−8, 9−5）13 大同特殊鋼

位置	【大同】	得	【湧永】	得
GK	柳川兄	0	福井	0
GK	倉谷	0	今井	0
FP	北村	0	津川	4
FP	藤中	6	木野	4
FP	柳川弟	1	穂積	2
FP	中本	0	高橋	1
FP	松原	2	松本	2
FP	花輪	2	山本	3
FP	中井	1	戸田弟	1
FP	野田	1	藤本	0
FP	大原	0	森	0
FP	清崎	0	戸田兄	0
	PT	（2）13	PT	17（1）

（審・岡前、佐野）

後記

大国 拓哉（読売新聞社運動部）

○……湧永は「打倒大同」の意気に燃えていた。立ちあがりこそ、意識過剰で堅くなり大同に先行を許した。8−5の劣勢。しかし、この点差が逆に気持ちを落ちつかせたようだ。23分、松本のシュートで1点を返すと、24、25分にはベテラン木野が連続ゴールをあげて8−8と追いついた。

「前半を2、3点差でついていけば、後半必ず逆転できる」。市原監督の計算は嬉しい誤算になって同点。そのとき「勝てる、自言がわいた」という湧永は、ハーフタイム中にもベンチ前でミーティング、慎重に勝つための作戦を練った。

そして後半――。4分、高橋がペナルティスローを決めて逆転すると、6、7分には速攻から津川山本がシュートで一気に11−8と3点差に広げた。リードしてからの湧永は、ベテラン木野が大同のポイントゲッター藤中をぴったりマーク。このマークで大同の動きはにぶり、ともすれば個人技にたより勝ち。木野が反則退場した20分過ぎに大同は野田、藤中らが再三ゴールを攻めたが、それも組織だったものでなく、福井の好守に阻ばまれ、わずか1点どまり。差は依然3点。ここで勝負はきまった。

○……市原監督の「後半、必ず勝てる」の計算はこんなことから生まれていた。

さる六月、営業関係にいたのではまとまった練習ができないと、部員全員が本社（大阪）から広島工場に移り、毎日午後五時の仕事終了と同時に全員が集って二時間か三時間の猛練習を積んだ。

本社時代は二時間程度の練習が週二、三回できれば良い方だったから練習量は一気に倍増したわけだ。

その練習量が「チームワークと後半になってもくずれないスタミナをつくりあげていた」からだ。

苦しい練習に耐えるうちに打倒大同の闘志が育ち、四十七年六月の全日本選抜大会以来十七戦して一度も勝てなかった大同を破ったばかりか、同チームが目指した四年連続全国ビック大会のタイトル独占という偉業までストップしたのだった。

大同が全国大会で敗れたのは、四十九年六月、日本実業団リーグの三景戦以来のこと。

第28回全日本総合選手選審判団

・審判長　安藤純光、・副審判長　清水正、・審判員　千野恒夫、加藤雅之、狩野幸介、幸田末之、森恭一、大塚文雄、大橋昭重、岡前義春、佐野和夫、斉藤実、佐分正典、佐々木茂喜、鈴木城、関川正道、徳前啓人、由利弘

日体大、大崎電気を破る

女子

▽1回戦

日本ビクター（NHL②・茨城） 26（15―1, 11―4）5 佐賀女子選抜（全国社会人）

東北ムネカタ（NHL⑧・福島） 12（6―3, 6―3）6 大阪体大（学連④・大阪）

ブラザー工業（NHL④・愛知） 34（20―1, 14―0）1 和歌山県商工信用組合（実連・和歌山）

日体大（学連①・東京） 7（4―2, 3―3）5 大崎電気（NHL⑦・埼玉）

東京重機（NHL③・東京） 18（9―1, 9―7）8 大和銀行（実連・大阪）

日立栃木（NHL⑥・栃木） 13（7―4, 6―3）7 東女体大（学連②・東京）

ジャスコ（NHL⑤・三重） 16（8―3, 8―2）5 武庫川女大（学連③・兵庫）

立石電機（NHL①・熊本） 33（13―3, 10―5）8 東京教大（東京）

○……日体大が守りの固さで大崎を降す殊勲をあげた。

特に、後半8分6―3から2点を返されたあと、残り11分間をよく持ちこたえたものだ。

もっとも、得意の速攻こそあまり出なかったが、前半1―2の劣勢からみせた岩本、藤井の3点連取や、後半4―3のあと宮崎、中村で突き放したプレーなど攻撃面の気力も大崎をしのぎ、順当な結果といってもいい。

注目の日立×東女体大は日立の走り勝ちに終った。東女体も悪いデキではなかったが、展開力でやはり実業団に及ばない。

同じことは、東北ムネカタに挑んだ大阪体大、ジャスコと対戦した武庫川女大にもあてはまる。

つねに同じ調子で攻め守る学生勢に対して、実業団は時間の経過とともに、相手の弱点を見抜き、それに対応するチーム力があるのだ。

このほかの試合では大和銀行と武庫川女大のまとまりが目立った。大和は重機の容しゃない攻撃に圧倒されたが、後半は増永、義川らで互角にわたりあう場面もあった。

ブラザーは、開始2分和歌山・清水に先取点を許したが、そのあと34連続ゴールという珍記録をつくった。

日体大、ブラザーには及ばず

▽準々決勝

ブラザー工業 12（5―3, 7―5）8 日体大

○……両チームともダブルポストを用いた速いボール廻しで得点機を狙ったが、わずかにブラザーの攻め口が多彩、10分すぎ宮平のサイドからの倒れこみと、中川のロングなどで4点連取、4―2とリードした。

後半5分1点差に迫られたが、日体のパスコースを読んでインターセプトからの速攻を決めて10分9―5と突きはなした。

日体は、立ち上り2―0とし、あるいはと思わせたが、そのあと16分間無得点だったことと、ブラザーに当り負けて速攻が出なかったのが敗因と云える。（千野恒夫）

【ブ工】		得
GK	山本	0
GK	浅谷	0
FP	中川	3
FP	佐々木	2
FP	國府田	3
FP	宮平	1
FP	小森	2
FP	楠石	1
FP	岩井	0
FP	山中	0
FP	木下	0
FP	宮本	0
	PT	(0) 12

【日体】		得
GK	大森	0
GK	堀田	0
FP	岩本	3
FP	門田	0
FP	中村	1
FP	水口	1
FP	宮崎	1
FP	藤井	2
FP	森	0
FP	坂村	0
FP	新原	0
FP	矢野	0
	PT	(2) 8

（審・徳前、加藤）

日本ビクター 17（10―2, 7―4）6 東北ムネカタ

【東北】		得
GK	熱海	0
GK	海村	0
FP	遠藤	0
FP	有賀	5
FP	鈴木	0
FP	清水	1
FP	本郷	0
FP	近内	0
FP	鈴木（谷）	0
FP	蒿郷	0
	PT	(1) 6

【日ビ】		得
GK	渡辺	0
GK	鈴木	0
FP	蓮見	1
FP	額賀	1
FP	加藤	3
FP	穂積	5
FP	小島	3
FP	斉藤	1
FP	染谷	0
FP	池田	2
FP	藤原	1
	PT	(2) 17

（審・大橋、鈴木）

○……ムネカタがせり合ったのは10分1―3まで。そのあとはビクターがスピード豊かなセットプレーと速攻で着々と加点、前半で大勢を決めた。

ムネカタは、ビクターの守りを崩すには、あまりにも動きが単調。そのうえ気力にも欠けたとあっては、完敗も仕方なかった。（佐野）

日立栃木 14（5―2, 9―5）7 東京重機

【重機】		得
GK	佐久間	0
FP	古佐原	5
FP	折口	0
FP	村上	1
FP	町田	1
FP	横山	0
FP	古谷	0
FP	関	0
FP	寄田	0
FP	細谷	0
FP	宮田	0
	PT	(0) 7

【日立】		得
GK	条谷	0
GK	高橋	0
FP	晴山	4
FP	桜庭	1
FP	田村	0
FP	山井	1
FP	小根沢	3
FP	島田	5
FP	大岩	0
FP	荒木	0
FP	箕輪	0
FP	吉田	0
	PT	(0) 14

（審・森、由利）

○……日立は動きの割に得点が伸びなかったが、それ以上に重機は不調で、前半は古佐原の2点だけ。

後半も同じような展開だったが日立は10分8―5からFTなどを有効に活かし島田、小根沢らがポイント、19分13―5。守っても出足のよさで重機のパスを寸断、一方的とも云える印象で勝利を握った。（佐分正典）

ジャスコ、惜しいPT失敗

▽準々決勝

立石電機 7（3―5, 4―1）6 ジャスコ

【ジャ】		得
GK	久保	0
GK	山本	0
FP	平田	0
FP	松下	3
FP	林	0
FP	金田	0
FP	鈴木	3
FP	河田	0
FP	笠	0
FP	若田	0
	PT	(2) 6

【立石】		得
GK	和田	0
GK	丸山	0
FP	篠田	3
FP	山下	0
FP	平下	0
FP	紀野	0
FP	島田	1
FP	蔵田	0
FP	池渕	2
FP	林	1
FP	実松	0
	PT	(2) 7

〇……蔵田を欠いた立石の出足が心配されたが、ジャスコはそこをついて松下の2本のPTなどで前半は5－3でリードした。

しかし、立石は池渕のPTで同点にした後、篠田のスカイプレーで逆転した。

ジャスコは後半2本のPTを失敗したのが大きな敗因となった。ジャスコベンチに用兵の迷いもあったようだが、立石GK和田の好守を賞したい。（青木）

ビクター、ブラザー振り切る

▽準決勝

日本ビクター 11（4－4, 7－2）6 ブラザー工業

【ブ工】

	選手	得
GK	山本	0
GK	浅谷	0
FP	楠石	1
FP	小森	1
FP	宮平	2
FP	国府田	1
FP	中川	1
FP	山中	0
FP	岩井	0
FP	木下	0
FP	佐々木	0
FP	宮本	0

【日ビ】

	選手	得
GK	渡辺	0
GK	鈴木	0
FP	蓮見	1
FP	額賀	4
FP	加藤	1
FP	穂積	0
FP	小島	1
FP	斉藤	2
FP	池田	2
FP	藤原	0
FP	染谷	0

（審・狩田 幸野）

11（2） PT （1）6

〇……一波乱巻き起こそうと意気込むブラザーは、最初から厳しいディフェンスでビクターの攻撃を封じ、ビクターに先取点はとられたもののよく粘り、前半は4－4のタイで終わる。

後半になると地力で上回るビクターが力をだし、額賀らの活躍で着実に点差を広げた。

ブラザーは前半のような動きがなくなり、シュートなどにもミスが目立ち、点をとれなかった。

後半23分、ビクター・池田が自陣からおよそ30mのロングシュートを放りこんだプレーは、みごとだった。（青木）

日立、後半力つきる

〇……優勝を狙う立石にとって大事な一戦だったが、蔵田の欠場（右脚こぶらがえり）はやはり痛かった。

前半はむしろブラザーが押し気味、立石は辛くも20分すぎ2本のPTを決めて少差でリードしたものの、いつもの立石のペースではなかった。

しかし、後半になると奮起した立石は紀野の鋭い動きと、巧者島田、篠田らがポイントをあげた。

日立は最後までこれといった策がなく、個人技に走って、チームプレーがまとまらず、10－3とはなされた15分すぎに2点を返しただけだった。（青木）

立石電機 12（4－3, 8－2）5 日立栃木

【日立】

	選手	得
GK	桑谷	0
GK	高橋	0
FP	晴山	3
FP	大岩	1
FP	山井	1
FP	小根沢	0
FP	島田	0
FP	大岩	0
FP	箕輪	0
FP	荒木	0
FP	田村	0
FP	吉田	0

【立石】

	選手	得
GK	和田	0
GK	丸山	0
FP	篠田	1
FP	平下	1
FP	山下	0
FP	紀野	8
FP	島田	1
FP	池渕	0
FP	林	0
FP	実松	1
FP	蔵田	0

（審・大塚 佐分）

12（4） PT （1）5

ビクターの粘り及ばず

▽決勝

立石電機 11（4－3, 5－6, 0－0, 2－1）10 日本ビクター

【日ビ】

	選手	得
GK	渡辺	0
GK	鈴木	0
FP	蓮見	2
FP	額賀	4
FP	加藤	0
FP	穂積	1
FP	小島	2
FP	斉藤	1
FP	池田	0
FP	染谷	0
FP	藤原	0

【立石】

	選手	得
GK	和田	0
GK	丸山	0
FP	篠田	2
FP	山下	2
FP	蔵田	1
FP	紀野	3
FP	島田	3
FP	池渕	0
FP	林	0
FP	平下	0
FP	実松	0
FP	橋ノ口	0

（審・狩野 幸田）

11（1） PT （4）10

後記

大国 拓哉

〇……「あと30秒」ボールをキープ、ビクター陣内へ攻め込む選手（立石）に。ベンチの井監督が大声をはりあげた。その声にろなづいたのが、一番遠い左サイドを走っていた蔵田。

10－10。延長後半、それも記録席のタイム計時は〝0〟を知らせていた。ポストで攻める立石。ボールが二度、三度選手間をまわるがシュートチャンスをつかめない「このまま時間切れか？」の声が出はじめたときだった。左サイドで島田からのパスを受けた蔵田は前のめりの体勢を素早く立て直すと、振り向きざまにシュート。ま

ペナルティースローコンテストによる勝敗の決定方法

日本協会はこの大会，全国大会では初めて第2延長後同点の場合，ペナルティスローで決着するルールを採用した。該当試合はなかったが，この大会における競技方法は次のとおりであった。

第2延長戦を終了しても勝敗が決定しない場合には次の方法によってペナルティースローで決定する。

1. PTを行なうプレイヤーは，その競技に登録されたフィールドプレイヤー（FP）でなければならならゴールキーパー（GK）も同様にその競技に登録されていなければならない。
2. 両チームの主将と2名のレフェリーが立ち合ってトスを行ない，使用するゴール（一方のゴールでPTを行なう）と先投あるいは後投を決定する。
3. 両チームよりそれぞれ3名のFPと1名のGKがセンターライン上に整列する（他のプレイヤーは，それぞれのベンチに着席する）。GKは交替できる。
4. トスによって先投となったAチームのFP．e．fgの3名のうち1名がPTを行なう。次のスロアーは後投となったBチームのFP．w．x．yの3名のうちの1名である。以下交互に各一投づつPTを行なう。
5. GKは，その都度入れかわるがゴールから出たGKは競技場外に出て，ゴールから6mはなれたところにいる。
6. なお勝敗が決定しない場合には，新らたに10名のFP（e．f．gあるいはw．x．yを含む）の中から1名がPTを行なう。このときおよび以後使用するゴールと先投あるいは後投はトスによって決定（2と同様にして）し，以下交互に勝敗の決するまでPTを行なう（スロアーは交替しても同一人でもよい）。

さかと思われた体勢からのシュートだったが、もののみごとに決まった。タイムアップ10秒前の出来ごと。監督の声にうなづき、相手の動きをよくみた落ちつきのあるプレー。そこには″さすがモントリオール五輪得点王″を感じさせるうまさがあった。

○……試合は、立ちあがり1点を争うシーソーゲーム。後半23分30秒、ビクターが蓮見の左からのシュートで9－8とリード、そのまま逃げ込むかと思えたが、その15秒後、今度は立石の山下が右からサイドシュートを決めて延長戦へ──。

延長後も、立石のGK和田の好守などもあってゲームは盛りあがった。後半1分、立石が篠田のジャンプ・シュートでリードしたときは勝負あったかにみえたが、ビクターも頑張り、3分40秒、額賀の速攻で追いついた。しかし、勝運は立石を見離さなかった。今大会限りで一線を退くという蔵田。しかも右足の筋肉痛でこの試合にだけ出場した蔵田。その彼女が最後を飾るかのように、放ったたった一本のシュートが、立石の四冠を決める劇的な決勝シュートになったのだった。

「生涯忘れることができない」という彼女の言葉には実感として迫るものがあった。

一方、ビクターにとって延長開始早々、蓮見、額賀、穂積が連続して放ったシュートが全てGKの正面をついて得点に結びつかなかったのが、最後までたたったのでは……。

（写真）一点を争う女子決勝、立石・島田の攻撃（撮影・山田真市）

近来になくスリル富む

総評

いい大会だった。表面的には、優勝は落ちつくべきところに納まった印象だが、波乱の末の湧永優勝であり、立石初制覇であった。

久々に採用した一本勝負のスリルが、各試合にみられ、選手たちの緊迫ぶりも、近来にないものがあった。

特に、男女決勝は、史上に残る激戦で見応えがあった。

こうした内容の試合が増えればファンを魅きつけることができるだろうし、いっそう技術も高まる

栄冠に輝やいた両チームは、それぞれ苦難の道を切り開いて到達した頂点であり、試合後の感激ぶりも、かってないほどドラマチックなものがあった。

惜敗した大同特殊鋼、日本ビクターの健斗もみごと。特に日本ビクターは、今季、立石とは1分3敗となったものの、敗戦はいずれも1点差であり、悲運というほかはない。

このほか、中大、名城大、京都産大、日体女子ら学生勢が気を吐いたのもよかった。東京教大(男)が、欧州チームのみせる「攻守分業」を試みていたのは、注目される。

モスクワにつながる若手のプレーも、一つの興味であったが、女子に好素材が多く見られ、将来に楽しみを残した。

また、男女ともGKの充実が目立ち、それが試合の密度をいっそう濃くしていた。（杉山　茂）

涙でぬれるチャンピオン

☆湧永薬品

ただでさえ感激屋の湧永儀助オーナーと村中明郎部長(前監督)は、残り5分となったあたりから、もうベンチに座っていられない。

優勝!! それも宿敵・大同に14連敗（ほかに3引き分け）の汚名を雪いでの快勝とあれば、興奮するなというほうがムリだ。

ベテランの戸田兄、森、高橋らの目はまっ赤。戸田兄は涙をぬぐおうともせず「もうこれでいつユニホームを脱いでもいい」とうわ言のように繰り返す。

テレビインタビューに引っぱり出された木野に、スタンドから期せずして拍手。思わず木野が絶句する劇的なシーン。

誰もが、湧永の、木野の長かった「苦しみの道のり」を知っていたのだ。

いつまでも胴あげのつづく輪の中で、津川(主将)、穂積、松本、藤本、福井、山本、戸田弟ら″ヤングパワー″の表情は底抜けに明かるい。

若い斗志は、恐れることなく大同に立ち向かっていった。

彼らが、明日からの追われる立ち場を克服した時、それは間違いなく「湧永時代」の開幕である。

☆立石電機

感激する選手たちから一人はなれて島田が、あたりをはばからず泣いた。ローズ色のユニホームがみるまにぬれていく。

誰も止めない。この3年間の彼女の歩みを知る者は一緒に泣きたかったに違いない。

3年前、大洋デパート炎上というアクシデントに見舞はれ、傷心の島田や蔵田、山下は手をさしのべてくれた立石電機山鹿工場に新天地を求めて移った。

再びハンドボールができる歓びはあったがデリケートな乙女心に環境の変化が影響しないわけはなかった。

周囲の期待が大きければ大きいほど″負担″がのしかかった。かてて加えて「オリンピック出場」というノルマ。

彼女たちは、歯を食いしばりながら、その重圧をはねのけ、ついに、全タイトル独占という偉業を遂げたのである。

足を痛め、満足に歩けぬ蔵田が決勝戦は自から望んで出場、痛々しい姿でプレーをつづけながら、延長後半終了10秒前、島田のパスを受けてシュートを決めた。

飛びあがって喜ぶ蔵田の姿を見た時から島田の目に涙があふれた

◇全日本総合に拾う

「東京教大」最後の大会

■第1日　全日本学生準優勝と波にのる東京教大が、秋のリーグ戦で苦い汁をすわされた日大に雪じょく。勝ち進んだが、昭和24年からの伝統ある校名でプレーするのはこの大会が最後。

新シーズンからは「筑波大」を名乗ることになる。

それだけに、いつにもまして先輩の姿がスタンドに目立ち、大先輩・的場益雄氏（全日本教職員連副会長）も、〃最後の教育大〃をさかんにカメラへおさめていた。

日体大、打倒実業団果たす

■第2日　男女ともに学生勢の発らつとした攻守が注目されたが、なかでも女子で日本リーグ代表の大崎電気を破った日体大の試合ぶりは、久々に、学連関係者の顔をほころばせた。

岩本徳子主将は、新聞記者に囲れ「ぜひとも実業団を破ろうと皆の気持ちが一つになっていました。会心の試合とは云えませんでしたが、学生最後の大会だけにこの1勝は忘れられないでしょう」と紅潮した表情で話していた。

男女別開催の時機か

■第3日　6年ぶりのナックアウト・システム。男子は4試合のうち3試合が、日本リーグ×学生といろ興味ある顔合せだったが、お客さまの出足はもう一つ伸びず関係者をヤキモキさせた。

高校生がちょうど試験期だったせいもあるが、目のこえた都会ファンは、この頃どうも〃ファイナル主義〃で、序盤戦はどんな競技会でもスタンドの入りは淋しい。

ある日本協会役員は「いかにベストエイトの激突とはいえ、一日8試合は多すぎる。近い将来、男女別々に開催することを考えたい」といっていた。

流れる曲は流行歌

■第4日　インターバルで山口百恵が唄い、ピンクレディの歌声がはずんだ——といっても、これはレコードでのお話。

主管の東京協会は、9月の日本リーグで、これまで行進曲というのが通り相場だった休けい時間中の音楽を、加山雄三のヒット曲に代えたところ、がぜん好評。

味をしめての流行歌第2弾というわけ。手伝いの学連委員や、高校部員たちが、愛蔵の盤を持ちこんで、時ならぬレコードコンサートだ。来年は日本ビクターに頼んで、いっそ実演にしたら、などと無責任な声もとんだ。

役員がっかりTV局にっこり

■最終日　別掲のとおり、この大会は、全国大会で史上初めて「PTコンテスト」の採用が発表されていた。

ところが、第2延長を終ってなお同点のケースというのは、そう簡単には生まれない。

「1回くらいは試してみたいものだ」といっているソバで、女子決勝・立石電機×日本ビクターが延長へもつれこんだ。

両者は、10月の佐賀国体で第2延長の末、引き合けという実績があるだけに、審判団は色めき立ったが、第1延長でケリがついてしまいガックリ。

もっとも、TV局のディレクターは、PT合戦にでもなったら、男子決勝の終盤が、放送時間からはみ出てしまうとかで、ホッとした表情だった。

打ちしおれる大同セブン

どうかしていた、としか云いようのない大同の試合ぶり。

前半15分4－5から連続4点をあげて逆転した時は、これで大同ペースと誰もが思ったにちがいない。

ところが、いかに湧永GK福井の美技にあったとはいえ、単調な突入ばかりでこのあと後半8分まで約18分間、1点も追加できなかったのである。

負傷（右手掌骨折）の中井を投入、いつもより早目に野田を送りこんだが、いっこうにリズムは戻らない。

そればかりか、後半なかばすぎは、点を入れられると、全選手がガックリ肩を落とし、19分14点目を失った後は、スローオフのために戻されたボールを誰も受けとらず、センターラインをこえて、湧永コートに転がるという失態さえみせた。

人の和を誇った〃大同城〃は、斗志をむき出しにする湧永の前にあまりにも、もろく崩れ落ちた。

顔面そう白な試合後の選手たちは、慰めの声をかけるのさえためらうような打ちしおれかただった。

その悔しさ、苦しさを乗りこえてこそ13連続全国大会優勝という金字塔がはじめて栄える、といったら、あまりにも今の大同にむごい言葉だろうか——。

なお、大同の全国タイトル独占が始ったのは、48年7月の全日本実業団からで昨秋の佐賀国体まで続き、この間の通算成績は61戦57勝3分1敗だった

【写真上は女子優勝の立石電機、同下は男子優勝の湧永薬品】

藤中、中井両選手 公式国際試合50回出場

日本協会は、モントリオール・オリンピックで、公式国際試合出場50回に到達した藤中憲二、中井武三両選手（ともに大同特殊鋼、FP）に対する表彰を、12月12日東京体育館で行ない、記念トロフィーを贈った。

木野実（湧永薬品、FP＝49年3月マーク）、本田洋（大阪イーグルス、GK＝50年10月マーク）についで史上3、4人目である。

△　△

藤中は、岩国工（山口）―日体大を経て大同入り、44年2月に全日本メンバーとなった。

学生時代からスピード豊かなプレーと、秀れたジャンプ力は定評があり、早くから日本の主戦アタッカーへの成長を期待されていた。45年の第7回世界選手権、46年のミュンヘン五輪予選などで着実な伸びを示し、特に予選における目のさめるような速攻は、晴れの代表確実とみえたが、安定感という点で他選手に一歩をゆずり惜しくも出場を逃した。

1年後、その失意からみごとに立ち直り以前にも増す破壊力と、独得のジャンピングプレーにみがきをかけ49年の第8回世界選手権でエース格、国際的にも評価を高めた。

さらにプレオリンピック、モントリオール五輪で「日本の藤中」の評判を動かないものとし、大同特殊鋼快進撃の主役ともなって、今や史上屈指の選手として一時代を築きつつある。1m78、74K、29才（22年11月生れ）。

46年11月のイスラエル戦以来、出場36試合連続得点、木野のもつ41試合連続（41年10月～48年9月）に迫っている。51試合の通算得点は145。

中井は、伏見工（京都）―同志社大を経て大同入り、藤中と同じ44年2月に全日本メンバーに加わり同年6月の欧州遠征へ19才で参加した。

当時の全日本監督・村田弘氏（現大阪協会副理事長）が、高校時代から、嘱望していたもので、本格的なオールラウンドタイプとして、木野の後継者に目された。

関東流の直線プレーを身上にする全日本のなかで、苦労した時期もあったが、黙々とトレーニングをつんで地力を貯え、ディフェンスプレイヤーとして得難い選手に成長していった。

試合ぶりは地味だが、要所にみせる鋭い攻めこみと配球力は、全日本、大同にあって欠かすことのできない存在であり、円熟した攻守は玄人好みだ。1m80、74K、27才（24年3月生れ）

藤中選手51試合のあと

①	昭44.	6. 21	ハンガリー	2点
②		6. 29	ルーマニア	0
③		7. 9	西ドイツ	1
④	昭45.	2. 26	※チェコ	0
⑤		2. 28	※ユーゴ	0
⑥		3. 1	※アメリカ	0
⑦		3. 3	※アイスランド	0
⑧		3. 6	※ソ連	0
⑨		3. 10	オランダ	0
⑩		3. 12	オランダ	1
⑪		3. 14	イタリア	4
⑫		3. 16	イスラエル	0
⑬		3. 18	イスラエル	0
⑭	昭46.	9. 4	スウェーデン	0
⑮		9. 11	スウェーデン	0
⑯		11. 14	イスラエル	1
⑰		11. 23	イスラエル	2
⑱		11. 28	韓国	1
⑲	昭48.	9. 1	ユーゴ	1
⑳		9. 9	ユーゴ	2
㉑	昭49.	2. 14	イスラエル	6
㉒		2. 17	イスラエル	2
㉓		2. 22	ユーゴ	7
㉔		2. 24	ユーゴ	2
㉕		2. 28	※東ドイツ	6
㉖		3. 1	※ソ連	1
㉗		3. 3	※アメリカ	4
㉘		3. 5	※ブルガリア	6
㉙		3. 7	※西ドイツ	11
㉚		3. 8	※スウェーデン	2
㉛		8. 31	東ドイツ	6
㉜		9. 1	東ドイツ	2
㉝		9. 7	東ドイツ	1
㉞		9. 8	東ドイツ	3
㉟	昭50.	9. 26	ソ連	4
㊱		9. 28	ポーランド	3
㊲		9. 29	デンマーク	1
㊳		9. 30	カナダ	3
㊴		10. 1	アメリカ	8
㊵	昭51.	3. 16	台湾	1
㊶		3. 17	韓国	6
㊷		3. 20	台湾	3
㊸		3. 21	韓国	1
㊹		4. 3	イスラエル	3
㊺		4. 5	イスラエル	2
㊻		7. 18	◎ソ連	6
㊼		7. 20	◎西ドイツ	6
㊽		7. 22	◎デンマーク	3
㊾		7. 24	◎ユーゴ	6
㊿		7. 26	◎カナダ	3
51		7. 27	◎アメリカ	2

◎オリンピック　※世界選手権

中井選手50試合のあと

①	昭45.	3. 3	※アイスランド	0点
②		3. 6	※ソ連	0
③		3. 10	オランダ	1
④		3. 12	オランダ	0
⑤		3. 14	イタリア	3
⑥		3. 16	イスラエル	6
⑦		3. 18	イスラエル	0
⑧	昭46.	9. 11	スウェーデン	0
⑨		9. 18	スウェーデン	0
⑩		11. 14	イスラエル	2
⑪		11. 20	韓国	4
⑫		11. 23	イスラエル	2
⑬		11. 28	韓国	1
⑭	昭47.	8. 26	アイスランド	3
⑮		8. 30	◎ユーゴ	1
⑯		9. 1	◎ハンガリー	2
⑰		9. 3	◎アメリカ	2
⑱		9. 7	◎ノルウェー	3
⑲		9. 9	◎アイスランド	0
⑳	昭49.	2. 14	イスラエル	3
㉑		2. 17	イスラエル	2
㉒		2. 22	ユーゴ	0
㉓		2. 24	ユーゴ	1
㉔		2. 28	※東ドイツ	2
㉕		3. 1	※ソ連	2
㉖		3. 3	※アメリカ	6
㉗		3. 5	※ブルガリア	4
㉘		3. 7	※西ドイツ	1
㉙		3. 8	※スウェーデン	4
㉚		8. 31	東ドイツ	2
㉛		9. 1	東ドイツ	1
㉜		9. 7	東ドイツ	0
㉝		9. 8	東ドイツ	2
㉞	昭50.	9. 26	ソ連	1
㉟		9. 28	ポーランド	1
㊱		9. 29	デンマーク	2
㊲		9. 30	カナダ	2
㊳		10. 1	アメリカ	5
㊴	昭51.	3. 16	台湾	5
㊵		3. 17	韓国	1
㊶		3. 20	台湾	6
㊷		3. 21	韓国	5
㊸		4. 3	イスラエル	1
㊹		4. 5	イスラエル	4
㊺		7. 18	◎ソ連	0
㊻		7. 20	◎西ドイツ	0
㊼		7. 22	◎デンマーク	3
㊽		7. 24	◎ユーゴ	0
㊾		7. 26	◎カナダ	3
㊿		7. 27	◎アメリカ	4

◎オリンピック　※世界選手権

蔵田（五輪得点王）を表彰

日本協会では、モントリオールオリンピック女子で個人最多得点選手いわゆる〝得点王〟になった蔵田照美（立石電機）選手を讃え、12月12日東京体育館で表彰した。蔵田は5試合で28得点をマーク。日本選手が世界選手権、オリンピックでこのような成績をおさめたのは男女を通じて初めて。

第2回日本リーグ

「1日2試合」では開催地不足

日本リーグでは、はやくも来年の第2回リーグ（前期・6月11日～7月31日、後期・9月23日～11月27日）の日程編成を行っているが、11月13日に〆切られた開催地募集では、第1回をしのぐ申しこみを受けながら作業はやや難行している。

▽

同日までに申し出のあった希望地は、前期が19協会、後期22協会で、このうち2日間開催もあり、前期で延べ23試合日、後期で延べ25試合日が確保され、第1回リーグとは比べものにならぬほど、地方協会の関心の高さを示したが、運営委では「1日2試合」を原則とする構想を強く打ち出しているため、必要とする前、後期各28試合にとどかない。

〝最悪〟の場合は、一部の会場で3試合以上を消化することで切り抜ける手が残されているが、「試合数が多いと、印象が散漫になりムードも盛りあがらない」という前回の大きな反省があり、極力「2試合」におさめたい意向だ。

日程編成の難事業を切りまわしている桑名照雄担当委員は『年間2シーズン、56試合日（全112試合）を必要とするということは、全都道府県に最低1回は日本リーグを招いていただかなければまかなえぬ勘定になる。

現在、申しこみを受けている会場のうち前・後期両方という都府県が16ある。前期だけ、後期だけという所（11）を合わせても、来年、日本リーグが立ち寄る所は27都道府県にすぎない。改めて、全国の協力をお願いしたい』という。

日本協会でも、日本リーグの構想を支持していることから、改めて、各地方協会に開催の呼びかけを行う意向だ。

3、4回戦は同日　青森国体成年男子

日本協会は12月12日東京での月例常務理事会で「国体問題」につき協議したが、日本リーグ勢の取り扱いは、結論が出ず、次回（1月）に持ちこされた。

これは、日本リーグに登録した選手（男女）を国体からはずそうとする一部の意見についてのもので、3部合同会議が、一応その線に近づいた結論を出したこともあって一気に解決するかにみえたが各常務理事の見解が散り、まとまらなかった。

なお、47都道府県参加種別（注52年度は成年男子）の設定によって、1日だけダブルヘッダーを組まねばならなくなり、今年は第3日（10月5日）の3、4回戦を当てることが決まった。

五輪特別強化委設置へ

日本体協の競技力向上委員会のなかに、オリンピック種目27競技団体（冬季を含む）からなる「オリンピック特別強化委員会」が設けられることが、確定的となった。

これは、オリンピック選手強化を効果的に運ぶために、かねてから日本体協、JOC（日本オリンピック委）などが検討を進めていたもので、来年度見込まれている国庫補助二億二千万円にもとずき強化の推進にあたろうというもの

日本協会では、昨秋11月の全国代議員会で「選手強化対策部」の復活を決めており、〝体協路線〟にそっての活動方針を早々に打ち出すものとみられる。

投書欄　明日への提言

日本リーグ勢は権威もて

機関誌12月号の東京選手権記事で、大崎電気など日本リーグ参加チームが、ほとんど上位に勝ち進めずに終ったことを読んだが、これは、日本リーグのイメージをダウンさせるものだ。

どのようなメンバーで出られたかは判らぬが、少くとも、日本リーグのチームは、観客の目に触れる触れないにかかわらずつねに相応の実力を見せるべきではないか。

もちろん、日本リーグチームを破るようなチームが出現することは、ハンドボール界にとっては結構だが、印象では東京選手権で、日本リーグ勢が、全力投球したうえで敗れたとは思えない。

それならば、初めからこうした地方大会に日本リーグのチームは出ないほうがいい。

日本リーグが、無雑作に敗れることは、日本リーグの権威そのものがうすれる。

加盟チームは、自分のチームの名前をもう少し大事にしてもいいのではないか。

【鎌倉・山下　修・会社員】

☆……「明日への提言」欄に原稿をお寄せ下さい。500字以内タテ書き。紙上匿名可。ただし氏名、住所、年令または職業をお書き下さい。〆切日はありません。

全国代議員会、理事会（11月東京）によって決められた「全国高校選抜大会(仮称)」～本誌既報～は、おおむね好感をもって迎えられているようだが、この大会は、いわゆる夏の大会・全日本高校選手権とはかなり趣を異にしている。「選抜」の周辺を解説しておこう。

▽　▽

この大会の発足は、高体連ハンドボール部事業が一つ増えるわけではない。これが最大の〝特色〟だ。

夏の全日本高校選手権、いわゆるインター・ハイスクールは学校教育の一環として、全国高体連の最大にして無二のエベントである。

新設の「選抜」は、青少年運動連絡協議会の承認を得たうえで日本協会が開く高校大会であり、高体連は関知しない建前になっている。

全国高体連は、インター・ハイ以外に、競技団体が高校生の全国大会を開く場合は、授業にさしつかえないことはもとより経費的にも一切、学校や生徒に負担をかけないことを要望しており、予選会開催さえ好ましくないとしている。

日本協会も、当然、こうした全国高体連の姿勢を知ってのうえで、「選抜」を具体化させたのだから問題は生じないと思うが、仮に、出場校を決定するための地方大会（県及びブロック）を開こうとした場合、夏の予選同ようには、必しもいかないことを、日本協会と地方協会は、充分に知っておかねばならない。

「選抜」のための大会運行は、県の高校関係者が主体になるのではなく、県協会やブロック協会の役員がたずさわなければならないのが本筋だ。

とは云っても、実際は、高校関係者の協力がなくてはスムーズにことは運ばないだろうし、ハンドボール界は、地方役員の大部分が高校関係者といった実態もあって、破たんは少かろうが、少くとも、こうした事情をわきまえておかないと、近い将来、トラブルを招く。

要望点が満足でない場合、全国高体連は、共催の認知をおろさぬ構えなことも、日本協会は知っておく必要がある。

せっかくの好企画、幸に第1回大会（53年3月）まで時日もあるのだし、もういちど運営面を点検しなおすのもムダではないと思う。

「選抜」は日本協会主催の高校大会

加盟金、登録金への依存度高まる……52年度予算

全収入予算の46％が、加盟金と登録料だけに、各都道府県協会、チームの理解と協会が望まれる。

日本協会は、本誌前号既報のとおり、昭和52年度一般会計予算の編成を進め、全国会議で加盟金と登録金（チーム・個人）の一部値上げを決めたが、その事業予算は別掲のとおりである。

財務部（財務委）の査定によって、各部からの要求額を約300万円削減したもので、手いっぱいの金額だ。

なお、財務部による収入予算は加盟金275万、登録料一、〇四二万円、補助金435万、公認料430万、審査料35万、日本リーグ権料200万、雑収入約473万円となっており、51年度は、補正段階で組みこまれた日本リーグ権料が、当初から勘定されていることや、登録料で51年度比459万円の増を見込んでいるのが注目される。

昭和52年度日本協会事業予算(円)

項目	金額
▽総務企画部	13,470,800
内訳・事務局	9,810,800
加盟金	540,000
渉外費	350,000
事業費	2,770,000
▽財務部	430,000
▽3部会合同委	100,000
▽審判部	3,498,500
▽技術部	7,160,000
▽普及指導部	4,250,000
総計	28,909,300

（編集委は52年度からは「特別会計」に戻る予定）

代議員の改選始まる

日本協会は、現・代議員の任期が12月31日で切れることから、各組織、団体に新代議員(任期2年)の届出を求めているが、本誌〆切り（12月15日）までに、次の25氏が決まっている。

新代議員による定例全国代議員会は、来春2月20日東京で開かれる予定。

豊島慶男(秋田)、箱崎敬吉（岩手)、遠藤道雄（福島)、若崎重富(神奈川)、古屋正(山梨)、岡村昭二(東京)、桑名照雄(栃木)、若山博(石川)、庭山政幸(新潟)、角勉(富山)、志田省吾(福井)、柳沢民弥(長野)、久保田竜治(静岡)、中根武彦(三重)、栗脇巌(愛知)、前田吉弘(大阪)、常松喬(兵庫)、堀内俊夫(奈良)、松原紀機(鳥取)、甲斐忠義(佐賀)、島田秀四(熊本)、仲田豊順(沖縄)、岡部正文（全日本実連)、山田計（全日本教職員連)、藤松博（全日本学連)

中央、無敵の2年連続優勝 2位に東教大

第19回（女子第12回）全日本学生選手権は11月24日から28日まで初めて名古屋市で開かれた。

32校による男子は中央（関東）が，エース蒲生を中心に圧倒的な強味をみせ，決勝でも初進出の東京教大（関東）の善戦を退けて2年連続優勝をはたした。中央は対学生無敗記録を41（40勝1分）とした。

13校による女子は予想どおり日体―東女体の関東同士の決勝から日体の速攻が冴え，2年ぶり10度目の優勝を飾った。

女子は日体10度目・全日本学生選手権

名城、明治に快勝
京都産大は日大破る

▼男子1回戦

中央（関東）	31	15 16	4 10	14	福岡教大（九州）
名古屋大（東海）	19	6 13	10 6	16	金沢工大（北信越）
順天堂（関東）	22	7 15	7 8	15	大阪大（関西）
早稲田（関東）	30	16 14	3 5	8	京都教大（関西）
東北学院（東北）	20	9 11	7 8	15	鹿児島大（九州）
愛知教大（東海）	27	17 10	8 5	13	広島大（中四国）
名城（東海）	18	9 9	5 3	8	明治（関東）
法政（関東）	21	13 8	11 6	17	大阪経大（関西）

以上愛知県体育館

日体（関東）	19	13 6	9 9	18	九州産大（九州）
東京教大（関東）	16	6 10	8 5	13	同志社（関西）
近畿大（関西）	24	13 11	9 8	17	金沢大（北信越）
岐阜大（東海）	13	8 5	7 3	10	芝浦工大（関東）
愛媛大（中四国）	14	7 7	8 5	13	東北大（東北）
京都産大（関西）	21	12 9	10 4	14	日大（関東）
中京（東海）	29	11 18	2 5	7	室蘭工大（北海道）
大阪体大（関西）	22	12 10	6 7	13	慶応（関東）

以上名古屋市体育館

○……愛知県体育館会場では、名城が明治を圧倒して注目された。立ちあがりこそ互角だったが、俊敏・高橋の巧技で点差をあけはじめ、左右3人づつという異色の攻撃陣が多彩な展開で後半9分13－4、大勢を決めた。

順天堂×大阪大は小柄な順天堂がキビキビとした動きで主導権を握ったが、大阪大は後半8－16から反撃、秦の活躍で10分4点差まで追いあげた。しかし、順天堂は選手交代などで巧みに立ち直り押し切った。

好カードとみられた法政×大阪経大は、互いに組織攻撃がまとまらず乱戦模様だったが、攻め口でわずかに優る法政が、後半10分10－10から4点を加えて先行、辛くも逃げこんだ。点差の割に迫力がない試合だった。

東北学院×鹿大は、後半10分14－10と予断を許さなかったが、東北はそのあと千葉（世界学生代表）などの好シュートで連続4点、安全圏に入った。

名大×金沢工大は、前半なかばすぎの連続得点で優位に立った名大が、後半の金沢工大の反撃をかわした。

○……名古屋市体育館会場では岐阜大が過去8回優勝の名門・芝浦工大を破り、コートサイドをわかせた。

前半はともに単調な攻めを繰り返すばかりだったが、後半、岐大は藤井、宇野らが好機を活かして得点、20分10－5とした。

芝浦は岩佐と舛屋にボールを集め必死に反撃、26分10－12にと追いすがったが及ばなかった。

京都産大×日大は東西の2位同志（注・日大は早大との同率）とあって関心を集めた。

先行された日大が、後半すぐに2点を返し6－9、もつれるかとみえたが、動きに優る京産大は生駒－北野の世界学生コンビを軸に優位をはなさず、10分以降は一方的といってもよい展開だった。両校合わせて6回の警告はいただけない。

愛媛大×東北大は、愛媛が前半のリードを保って後半5分9－7としたが、東北はそのあと杉原、木村が交互に得点、10分11－9と逆転する粘りをみせた。

しかし、愛媛は15分同点のあと中村、秦で主導権を戻し、拙い守りから、いちどは同点とされたが23分秦のあげた勝ちこし点を守り切った。

日体×九産大は、九産大が前半20分7－2とし、その後、追われながらも絶えずリードをつづけていたが、後半なかばすぎから互角となり25分18－18、日体は残り3分池之上のミドルで辛くも決勝点をあげた。九産大には悔やまれる一戦だろうが、もつれたのはスコアだけ、まったくの凡戦だった。

ダークホースぶりを期待された慶応は、攻撃面では大阪体大と五分にわたりあいながら、守りのもろさで敗れた。

中京が室蘭工大に大勝して、東海勢は5校揃って2回戦へ勝ちあがった。

法政、抽せん負けの不運
中京は大体大に惜敗

▽同2回戦

中央	42	22 20	4 2	6	名古屋大
早稲田	28	13 15	10 5	15	順天堂
東北学院	27	13 14	5 4	9	愛知教大
名城（抽せん勝ち）	20	0 2 : 12 6	1 1 : 7 11	20	法政

引き分け

東京教大	14	8 6	9 2	11	日体
近畿大	21	10 11	9 7	16	岐阜大

以上愛知県体育館

京都産大	27	15 12	2 6	8	愛媛大
大阪体大	14	6 8	7 6	13	中京

以上名古屋市体育館

○……名城×法政は大激戦。延長前半、鈴木康の勝ちこし点で、名城が勝ったかにみえたが、法政は後半3分水本が同点、そのまま引き分けた。延長前、賞讃されるのは残り2分16－18とされた名城がPTと終了寸前西浜のサイド攻撃

で同点とした粘りだ。法政は身長差を活かし、前半の優位を、後半も宮本の活躍などで21分17−13とキープしながら、終盤、名城の気力をかわし切れなかった。
○……中京の敗戦も不運といえた残り5分13−12とリード、それまでの勢いから有利とみえたのだが26分北川に同点、残り30秒丸井に劇的な決勝シュートを奪われてしまった。

大体大は前半20分すぎ4−6から佐々木、能波の活躍で主導権を奪いとったが、動きにもう一つ鋭さがなく、後半10分間は無得点、その間に3本のPTで追いこされ自から苦しい戦況としたのは拙い
○……東教大×日体は、後半、日体の反撃でせりあいとなったが、余裕をのぞかす東教大は、守りの固さもあって順当勝ち。

近大×岐阜大は、岐阜大が8−13から粘り、15分14−15としたが近大は20分すぎ、態勢を立て直すや、一気に攻めこんで勝利を握った。

歴代優勝校

回	年	優勝校
①	昭33	芝浦工大
②		芝浦工大
③		芝浦工大
④		芝浦工大
⑤		芝浦工大
～以上11人制		
⑥	昭38	立教
⑦		芝浦工大
⑧	昭40	芝浦工大
⑨		芝浦工大
⑩		立教
⑪		日体
⑫		日体
⑬		日体
⑭		日体
⑮		日体
⑯		法政
⑰		早稲田
⑱		中央
⑲	昭51	中央

〔女子〕

回	優勝校
①	日体
②	日体
③	日体
④	日体
⑤	東女体
⑥	日体
⑦	日体
⑧	日体
⑨	日体
⑩	日体
⑪	東女体
⑫	日体

た。

中、早、京産は揃って前半で勝負を決める強豪ぶりだった。

京産大、大体大に逆転勝ち
中央、早稲田をつぶす

▽同準々決勝

中央 22（10−4、12−9）13 早稲田

【早大】		得
GK	阪本	0
GK	安田	0
FP	鈴木	0
FP	泉	5
FP	洞ケ瀬	3
FP	武井	4
FP	北里	1
FP	石川	0
FP	筏	0
FP	吉見	0
FP	武藤	0
FP	横山	0
	(0) PT	13

【中央】		得
GK	小松	0
GK	板橋	0
FP	関	2
FP	西窪	3
FP	坪子	3
FP	蒲生	6
FP	金沢	3
FP	長野	5
FP	中村	0
FP	大久保	0
FP	佐藤	0
FP	大林	0
	(3) PT	22

（審・幸田 新井）

○……早大の斗志に期待されたがやはり、持ち駒の厚さ、多さで中央に一歩も二歩もゆずった。特に中央は、蒲生という決め手をもつのが大きい。

早大はせっかく追いすがっても蒲生の〝一発〟で引きはなされ、さらに西窪、長野らに走りまくられた。

中央連覇の前に立ちはだかるのは早大だけといわれたが、あまりにも真正面から勝負を挑みすぎ、中央ペースに引きこまれ一方的な試合になったのは残念だった。（吉田定静）

名城 14（7−2、7−6）8 東北学院

【東学】		得
GK	熊谷	0
GK	手坂	0
FP	鈴木	0
FP	千葉	5
FP	佐藤	0
FP	佐々木	0
FP	大友	1
FP	宋	1
FP	井上	0
FP	木村	1
FP	工藤	0
FP	門脇	0
	(1) PT	8

【名城】		得
GK	松井	0
GK	木村	0
FP	鈴木輝	1
FP	高橋	3
FP	鈴木康	4
FP	西浜	1
FP	谷元	3
FP	安藤	2
FP	瀬島	0
FP	山下	0
FP	平山	0
FP	江崎	0
	(2) PT	14

（審・新村 山本）

○……波にのる名城は、5分1−2から連続6ゴール、あっさり主導権を握った。特にロングシュートを効果的に使った攻撃は巧く、また新人GK木村のプレーもみごとだった。

東北は、後半なかばすぎになって、ようやくテンポに乗ったが、23分7−11とするのが精いっぱい健斗空しかった。

東京教大 21（9−4、12−5）9 近畿大

【近畿】		得
GK	岡本	0
GK	佐伯	0
FP	夏原	3
FP	浜本	0
FP	福原	0
FP	芝田	0
FP	西辻	4
FP	長谷川	1
FP	島川	0
FP	田辺	1
FP	吉田	0
FP	岩田	0
	(1) PT	9

【教大】		得
GK	須波	0
GK	上原	0
FP	白井	3
FP	小西	1
FP	西川	3
FP	浜田	6
FP	川原	5
FP	中村	1
FP	佐藤	0
FP	小山	0
FP	滝口	0
FP	竹内	0
	(2) PT	21

（審・横井 細井）

○……東教大の固いディフェンスに近大はつけこむスキがなく、一方的なゲームだった。

久しく、全日本の上位戦に登場していなかった東教大だが、秀れたフットワークと、着実なプレーは、みごとなものがあり、改めて基本技の重要さを教えた。（浅田邦雄）

京都産大 14（4−7、10−6）13 大阪体大

【大体】		得
GK	松岡	0
GK	青木	0
FP	西上	0
FP	佐々木	3
FP	丸井	3
FP	能波	5
FP	北川	1
FP	崎野	1
FP	大屋	0
FP	島中	0
FP	多田	0
FP	門河	0
	(4) PT	13

【京産】		得
GK	清水	0
GK	松村	0
FP	西田	2
FP	生駒	5
FP	北野	1
FP	木村	3
FP	藤本	1
FP	松井	2
FP	浅田	0
FP	田中	0
FP	日比	0
FP	林	0
	(3) PT	14

（審・岩永 浅田）

○……大体大は11分までに速攻、PTなどで得点、京産大も生駒のロングを軸に粘るが、大体大は好ペースで試合を運び、後半10分10−5とはなした。

ところが、このあともう一押しがなかったために京産大につけこまれ、20分11−10と詰まり、さらに23分、手痛いPTで同点とされた。こうなると京産大有利、26分生駒で待望のリードを奪い、27分松井、28分西田とたたみかけ14−11と、驚異的な反撃に成功した。

大体大も捨てず、残り50秒1点差としたがついに及ばず、大きな波乱を招いた。（横井保信）

中央、善戦名城突き放す
東教大は京産大押し切る

▽同準決勝

中央 16（9−6、7−6）12 名城

【名城】	得
GK 松井	0
GK 木村	0
FP 高橋	4
FP 西浜	1
FP 谷元	1
FP 鈴木康	4
FP 鈴木輝	0
FP 安藤	2
FP 山下	0
FP 江崎	0
FP 平山	0
FP 瀬島	0

【中央】	得
GK 小松	0
GK 板橋	0
FP 蒲生	4
FP 関	1
FP 金沢	5
FP 西窪	4
FP 坪子	1
FP 長野	1
FP 大林	0
FP 佐藤	0
FP 大久保	0
FP 由利	0

（審・新村、山木）

16（1）PT（2）12

○……中央の攻撃陣は自信にあふれている。立ち上り、いきなり大砲・蒲生のロングシュート3本などで10分4―1と先行、その後もソツなく加点して20分7―2とリードを保った。

名城は、緊張の解けた20分すぎからサイド攻撃に活路を見出し、じわじわと追いあげ、中央がやや気を抜いたこともあって後半10分11―11の同点になった。

これで、ゲームは再び活気づいたが、中央は11分金沢のゴールを口火に3連続得点で、名城にリードまでは許さず、ディフェンスも締まって、善戦の名城を突き放した。

名城のスピードある攻撃と斗志から、スタンドを魅了させる好試合となった。（幸田末之）

東京教大 18（9―5, 9―7）12 京都産大

○……東教大は序盤、京産大の調子が整わぬスキをついて15分3―0、京産大も15分すぎからようやく動きが活溌となったが、東教大の要所を逃さぬ攻防にあって追いあげられなかった。

そのうえ後半15分から15分間スピードが鈍ったところを、まとまりのある東教大に攻めこまれ、連続点を奪われ、前日、せっかく大阪体大を破りながら、決勝進出を阻まれた。

【京産】	得
GK 松村	0
GK 清水	0
FP 西田	1
FP 生駒	2
FP 北野	2
FP 木村	0
FP 藤本	5
FP 松井	1
FP 浅田	0
FP 日比	0
FP 田中	1
FP 林	0

【教大】	得
GK 須波	0
GK 上原	0
FP 中村	2
FP 川原	2
FP 浜田	2
FP 西川	7
FP 小西	1
FP 白井	3
FP 佐藤	1
FP 橋本	0
FP 滝口	0
FP 竹内	0

（審・山本、新村）

18（2）PT（3）12

東教大は、特に目立った選手はいないが、全員忠実なプレーを見せ、攻守のバランスが実によくとれていた。（岩永重之）

▽同3位決定戦

京都産大 17（8―7, 9―6）13 名城

○……勝負のかかった後半、京産大は後半、生駒の4連続ゴールで12―7とした。名城は10分すぎから反撃、23分13―13と追いついたのだが、京産大は残り5分、最後の力をふりしぼって北野、松井らがなだれこみ決定的な4点をあげた。両校ベストをつくした好試合（岩永）

東教大のチームワーク光る

▽同決勝

中央 15（7―6, 8―5）11 東京教大

【教大】	得
GK 須波	0
GK 上原	0
FP 中村	2
FP 川原	0
FP 浜田	2
FP 西川	4
FP 小西	0
FP 白井	2
FP 佐藤	0
FP 滝口	1
FP 竹内	0
FP 山上	0

【中央】	得
GK 小松	0
GK 板橋	0
FP 蒲生	7
FP 関	1
FP 坪子	4
FP 長野	2
FP 金沢	1
FP 西窪	0
FP 中村	0
FP 大林	0
FP 佐藤	0
FP 大久保	0

（審・新村、山本）

15（0）PT（0）11

（朝日新聞名古屋運動部）

後記　改田智洋

○……個人技に対して組織力がどこまで通ずるかという点で、この試合は興味があった。わずかに個人技に差がついていても、組織力に優れている方が試合で勝つのはチーム・プレーでは当然のこと。だが、結論からいうと、この試合は、東教大の大西監督のいうように「選手個々のキャリアの差。チームワークといっても、個々の技がこう違っていてはやはり、あそこまでが精一杯」となった。いい変えれば、それだけ中央の選手一人一人の技術が優れていたということになるのだ。

○……中央は学生でただ一人モントリオールオリンピック出場選手となった蒲生をはじめ、関、西窪、坪子、金沢、長野、それにGK小松と好選手がずらりと並んでいる。このほかの選手も高校時代からトップレベルにいた人がほとんど。日本リーグのチームと比べても見劣りしないほどだ。

一方の東教大は出場した四年生六人のうち三人が大学にはいってからハンドボールを始めたといわれる。しかも、関東学生では三年前二部落ちし、昨年秋に一部に返り咲いたというチーム。この選手層の差、さらに今年の秋の関東学生リーグで21―29で敗れたことなどから考えると、勝敗は目に見えているかのように思われた。

ところが、東教大は攻撃では中村、滝口がはいり、守備ではこの二人に変って小西、竹内がはいる個々の選手が持っている技をフルに発揮しようという作戦だ。これが見事に成功していた。このため試合は予断を許さないものになった。東教大の組織力が王者中央に一歩もひけを取らなかったのだ。

○……立ち上り中央は右サイドの金沢からポストの坪子にと渡るプレーで、あっさり先取点をあげたさらに四分には蒲生のパスカットから二線速攻で、蒲生のシュートが決って2―0。しかし、東教大はGK須波（二年生・富山高出）の活躍で、その後加点を許さない。

逆に西川の右サイド、GKにから白井にと渡るワンパスの速攻、そして再度西川のシュートで逆転した。東教大がリードを奪ったのは、この時だけ。しかも時間にしてわずか四分間だった。だが、中央に得点されてもピックと食い下っていく果敢な攻守は見事だった。蒲生が試合終了後、「調子が出ず、シュートが思うように決らなかった」といった。前半で十本近いシュートを放ってわずか三本しか決まってないからだ。もちろん調子も悪かっただろうが、東教大の好ディフェンスに打たされた

中央，41戦無敗

～対学生チーム～

結果	相手
○19―7	明治
○25―13	芝浦工大
○20―12	日大
○24―13	慶応
△21―21	早稲田
○17―15	法政
○25―11	日体
以上50年関東学生春季	
○25―16	東京教大
○24―15	明治
○27―17	芝浦工大
○21―18	日体
○15―14	慶応
○20―17	早稲田
○24―19	法政
以上50年関東学生秋季	
○35―9	岐阜大
○32―14	明治
○27―10	日大
○17―14	法政
○15―14	大阪体大
以上第18回全日本学生	
○不戦勝	芝浦工大
○18―16	日体
以上第13回東京選手権	
○21―17	東京教大
○40―15	芝浦工大
○22―17	慶応
○26―7	明治
○31―9	法政
○27―13	早稲田
○35―17	日体
以上51年関東学生春季	
○31―14	日大
○31―14	明治
○34―23	慶応
○29―21	東京教大
○33―18	法政
○39―17	日体
○27―22	早稲田
以上51年関東学生秋季	
○21―14	東京学芸大
以上第14回東京選手権	
○31―14	福岡教大
○42―6	名大
○22―13	早稲田
○16―12	名城
○15―11	東京教大
以上第19回全日本学生	

という形になり、GKに取られていたことがなかった。GKに防がれたシュートの中にはペナルティスローもはいっていた。いかに須波の動きがよかったかがわかる。
後半の立ち上りも東教大は得点して7－7と追いついた。だが、組織力で食いさがるのもここまであとは糸が切れたかのようになって、十二分間に5点を奪われてしまった。
○……試合終了後、東教大の大西監督は「やれば出来るということが、晴れの舞台で評価されて満足だ」という。東教大という名で学生の大会に出るのはこれが最後。その最終戦を優勝で飾ることは出来なかったものの、初めての二位この東教大の健斗は大会史上にいつまでも残ることだろう。
中央は個人技だけでごり押しした感じのような書き方になったが決してそうではない。随所で見せた多彩な攻めのフォーメーション蒲生をセンターに置いた守備の動き、いずれもまとまりがあった。ただ、東教大と比べた場合、あまりにも個々の選手のキャリアと技の差があったため、この点を強調してみたのだ。

――西窪、鍋田2年連続――
ベストセブン発表

全日本学連は大会終了後、この大会のベストセブン（男女）を次のように決め、閉会式で表彰した。
男子の西窪、女子の鍋田は2年連続、男子の蒲生は2年ぶり各2度目の受賞。このほかの選手はいずれも初。
★男子・GK小松伊佐夫・FP蒲生晴明、西窪勝広（以上中央）、浜田浩嗣（東京教大）生駒靖夫（京都産大）、高橋良輔（名城）、洞ケ瀬直幸（早稲田）
★女子・GK鍋田美佐子（東女体大）・FP中村美穂子、岩本徳子、藤井日出子（以上日体）、甲斐恵子（東女体）、福島恵子（武庫川女）、平山春代（大阪体大）

早稲田、大体大破り5位

▽同5位決定トーナメント1次戦
早稲田 22（12－7　10－4）11 近畿大
大阪体大 21（10－5　11－6）11 東北学院
▽同5位決定戦
早稲田 22（10－8　12－7）15 大阪体大
○……全日本総合選手権への出場権をかけての対戦。どの試合もリードを奪われると追いあげる気力をなくしたのは連日の試合からくる疲れだろうか、所せん〝敗者復活〟であったからだろうか。
早大×大体大は、後半8分12－10とせっていたが、早大はここで連続5ゴール、相手をねじふせた

日体の速攻冴える　女子

▼女子1回戦
東京教大（関東） 11（3－5　8－2）7 中京（東海）
福岡教大（九州） 6（4－1　2－1）2 岐阜大（東海）
武庫川女（関西） 10（4－1　6－4）5 日女体大（関東）
大阪体大（関西） 14（8－2　6－7）9 中京女（東海）
成蹊女短（関西） 11（2－4　9－1）5 愛知教大（東海）
○……緒戦を飾った東教大×中京が白熱。中京は前半15分すぎ1－3の劣勢を今木、都築らではね返し、その優位を後半8分まで持ちこんでいたが、東教大は菊地のロングで追いつき、15分森戸で再び先行した。中京も懸命に粘ろうとしたが、調子を戻した東教大はその後も着実に加点した。
愛知教大×成蹊は、前半、愛知教大が鈴木、藤井の活躍でリードを奪ったが、後半になると成蹊の出足のよい攻撃が冴え、津田の連続ゴールなどあって一気に逆転した。

大体大、学芸を押し切る
東女は東教大かわす

▽同準々決勝
東女体大（関東） 8（4－1　4－1）2 東京教大
○……上り調子の東教大がどう食い下るか興味がもたれたが、前半15分間、相手を1点におさえながらPTをはずすなどあって、次第に相手のペースとなってしまった
東女体大は、GK鍋田の堅守などディフェンスの固さから、一転好機をつかみ、危な気ない試合ぶりだった。
（吉田）
武庫川女 16（10－2　6－2）4 福岡教大
○……微妙な女性心理に不安定な要素をもたらすようなユニホームを着せられたというハンデキャップをものともせず、みごとなパスワークと走力、それにGKの好守と相まって武庫川女が圧勝。福岡も力いっぱい頑張ったが地力の差はいかんともしがたかった。
（新井節男）
大阪体大 11（6－4　5－1）5 東京学芸大（関東）
○……両校ともスピードはあるのだがパスがつながらず、好機の割に苦しい展開。大体大は4－0から4－4とされ、前半終了まぎわの2点で、どうにか先行した。
後半、大体大はようやくリズムを取り戻し、中盤二本のPTにも恵まれて15分10－4、勝負を決めた
学芸は前半、シュートがポストに当ったり、相手GK滝本に読まれたりで実らず、これがたたった
（川島克之）
日体（関東） 16（6－4　10－2）6 成蹊女短

○……2—6と開かれた成蹊は中川、富居で反撃、後半に興味をもたせたが、地力に優る日体は後半相手ディフェンスのわずかな乱れをついて切りこみ点差をあけた。

成蹊は、パスキャッチ、シュートミスが多く、忠実さが欲しいところだ。（岩永）

関西勢、一歩及ばず

▽同準決勝

東女体大 10（8—4／2—4）8 武庫川女

【武庫】得 000031310000
車川西川島 井下崎野本松
GK｛六西 FP｛小恒福 谷 今木榎佐坂赤
FP（審・幸山／新井）
【東女】GK｛田 FP｛沢斐隈峯口波山戸富田
鍋 三甲大西山川礎江福村 波
得 0 1020610000
10（0） PT （1） 8

○……東女は山口の強肩を活かして先制、三沢、川波の追加点で10分5—1とした。武庫川もひるまず、福島、今井らで追撃したのだが、東女のディフェンスを突き切れず追いこめない。

後半、東女はゲームメーカー・三沢の打撲退場が響き、攻撃のリズムを欠いたが、守りの固さは変わらず、武庫川の必死の反撃を振り切った。武庫川は、前半のチャンスをもう少し活かしたかった。（新村理文）

日　体 11（5—3／6—5）8 大阪体大

【大体】得 000400100003
本田橋山本津竹田村井辺田
GK｛滝柴 FP｛船平松中大岡野浅田福
FP（審・森／岩永）
【日体】GK｛森田 FP｛本田村口崎井尾 森 村野
大堀岩門中水宮藤寺 坂矢
得 003110222000
11（0） PT （0） 8

○……似かよった攻撃パターンを持つ両校だけに僅差のせりあいとなったが、日体は前半20分3—3からPTと中村のゴールで有利に試合を進めた。

後半30秒、大体大は福田で返して再び緊迫したが、日体は相手のミスを拾っての速攻と守りの固さで15分8—5、大体大も必死の反撃をみせたが2点差までで突き放された。好試合。（山本孝男）

▽同3位決定戦

武庫川女 9（5—3／4—1）4 大阪体大

○……手の内を知りつくしているせいか、動きに乏しい攻防だったが、武庫川は大型新人・榎崎のロングでリード、後半、榎崎がマークされるとサイドに廻し、小西、福島らがポイントするソツのない攻撃で制勝した。大体大は疲れから最後までバランスを崩し、勝機はなかった。（鈴木　城）

東女体大、後手にまわる

▽同決勝

日　体 8（4—4／4—2）6 東女体大

【東女】得 0 2101200000
GK｛鍋 田 FP｛斐隈峯口山波戸谷富田
甲大西山礎川江波蛇福村
FP（審・新井／幸田）
【日体】GK｛森田 FP｛本田村口崎井尾 森 村野
大堀岩門中水宮藤寺 坂矢
得 003011120000
8（0） PT （1） 6

○……日体は立ちあがり藤井、水口、宮崎が連続ゴールを奪い好調だったが、そのあと東女の詰め気味のディフェンスに攻め口をつまれ追加点は1点に留った。

東女は10分すぎからパスプレーで得点を返しはじめ、前半終了まぎわ同点に追いついた。

○……後半、日体は5分岩本で5—4としたが、東女も11分甲斐ですかさずタイ、決勝らしく盛りあがった。

しかし、日体は小柄な中村がよく走り13分勝ちこし点、14分藤井に巧くつないで7—5、優位をキープした。

東女も18分PT（山口）で1点差とし予断を許さなかったのだが、日体は終了1分前、サイドから水口が倒れこんで、これがダメ押し点になった。日体が要所で得意の速攻を実らせたのに対し、東女はリーダーの三沢が負傷で欠け、つねに後手にまわっていたのが響いた。（鈴木）

愛読者の皆さまへ

本誌は、例年1月号を休刊、年間11回発行を原則としていますが、52年2月2日が、日本協会創立40年記念日にあたることと、本誌が150号に達しますので、今年に限り1月号を発行しました。ご愛読下さい。

なお、次号（2月1日発行予定）は「150号記念号」として、かねて懸案の大会記録特集号とするよう準備中です。このため、次号は一般記事はいっさい取り扱いません。予めご了承のうえ、過去40年の主要記録（スコア）を網らしたその内容にご期待下さい。

1月号発行にともなう購読料は年間購読者には特別負担はおかけしません。

52年1月

日本協会機関誌編集委員会

来年のICは大阪

全日本学連全国役員会は、11月25日名古屋で開かれ、来年の第20回（女子第13回）全日本学生選手権を11月大阪で開くことに決めた。

東西対抗（9月）は、3学連から希望が出たため、調整後に発表される。また、西敏郎氏逝去によって空席となった会長の後任は決まらなかった。

日本、スピード戦法に活路

～世界学生選手権近づく～

有力なルーマニア、ソ連

第7回世界学生選手権は新春1月9日から16日まで、ポーランドのワルシャワ、タルヌーフ、クラコウ、ビアリイストック、ブロックの5都市で開かれる。

参加国は日本など14ケ国。4組の予選リーグのあと、各組上位2ケ国が4ケ国づつ2組に分かれ準決勝リーグ、各組同位で順位決定戦が争われる。

ベストエイト進出を狙う日本の活躍などを探ってみた。

日本、チュニジア戦がカギ

予選リーグの組み分けは別掲のとおりで、日本は3連勝を狙うルーマニアと顔合せしなければならないが、チュニジアには前回（昭50）、25―23で勝っており、ベルギーも国際的にはCランクだけに2勝1敗での突破はじゅうぶんに期待できる。

日本は、学生ナンバー・ワンの中大から加わる関、GK小松ら5人を軸に、どちらかと云えば、技巧的なチームカラー。

パワーでの勝負をさけ、スピードとパスプレーで、〝ヨーロッパの壁〟に挑もうというのがコーチングスタッフの狙いだ。

各国は、ナショナル以上に、若さにモノを云わせた思い切りのよい直線プレーを身上としており、この日本策戦の成否は興味深い。

問題は、前回、大きな反省として残ったディフェンスであろう。

特に、最近の国内学生界は、守りの拙さが各大学共通の弱点といわれているだけに、心配である。

それともう一つ、ヨーロッパ各国の情勢がほとんどつかめないことだ。

外国選手のプロフィールには、ほとんど職業は記入されていず、所属チームどまり。ご承知のように、ヨーロッパはクラブが主体だけに、この線から選手のキャリアを探すだすのは難しい。わずかに年令を頼りに、陣容を予想するのが精いっぱいである。また、この大会は在学中なら28才までOKだし、一九七六年度内に卒業した〝元学生〟は出場資格がある。

チュニジアは、モントリオールオリンピックでは、同国側の事情から2試合（2敗）を行っただけで棄権したが、この時のメンバーのうち、20代前半の選手が9人いるだろう。

おそらく、今回も、彼らが主力だろう。エース格はレバイ、ベンサミルの190cmコンビ。モントリオールで活躍したクライの実力もなかなかだ。

チュニジアも照準は〝日本戦〟だろうから前回の勝利で安心はできない。

ベルギーは、同国ナショナルがフランス2軍に5～6点差で敗れている（11月下旬）ことから、恐れる相手ではあるまい。

日本が、一目も二目もおくというルーマニアは、モントリオールで活躍したコスマ（180cm）、ドラガニタ（188cm）、ステフ（184cm）、グラボフスチー（191cm）、フォルカー（195cm）らが主軸となろう。フォルカーは、国際舞台にデビューして日がないが、将来〝世界のエース〟になろうという折り紙つきのアタッカー。

予選A組の全勝はもちろんのこと、第5回以来の連続優勝も大いに有望な布陣である。

ルーマニアと覇権を争うとみられるのは、オリンピック男女制覇で気をよくしているソ連、前回3位で地元の利をもつポーランド、学生界に力をそそぐスペインなどだろう。

ソ連は、過去2回（昭43、昭46）優勝しており、最近2回は決勝でルーマニアに敗れている。今回は是が非でもタイトルを奪還したいところだ。モントリオールで話題をまいた203cmのアンピロゴフはジョルジア経済大学生だし、202cmのクシュニリュクはサポロシでの冶金学を学んでいる。このほかマゼリヤウスカス、プラホティンらが中心。

ポーランドは、近い将来、世界の最上位に一度は必ずつくだろうといわれる。それだけに、どのような若手が姿をみせるか、注目が集まる。

スペインは、日本選手とあまりかわらぬ体格ながら、切れ味の鋭いプレーで、メキメキ力をあげている。

このほかでは、やはりユーゴ、ハンガリー、西ドイツといった国の力が高そうだ。

ユーゴとハンガリーはB組でハチ合わせするが、これは、予選屈指の好カード。

過去2回優勝のスウェーデンや東ドイツ、フランスらが姿を見せないのは、3月に世界ジュニア選手権が初開催される影響だろうか。

競技人口の大半が学生といわれ登場が期待されたインドも、ジュニアにはエントリーしている。

なお、日本の試合順序は9日ベルギー、10日チュニジア、11日ルーマニアである。会場はいずれもブロック市。

（茂）

予選リーグ組み分け

▽A組　ルーマニア（①）、日本（⑩）、チュニジア（⑪）、ベルギー

▽B組　ソ連（②）、ユーゴ（⑤）、アルジェリア、ハンガリー

▽C組　ポーランド（③）、ブルガリア、オランダ

▽D組　スペイン（④）、西ドイツ、イスラエル。○内は前回順位。

全日本学生代表団

・団　長	中沢　重夫	(45)	芝大ＯＢ
・監　督	三沢　澄	(33)	早大ＯＢ
・コーチ	一宮　昌平	(30)	日体ＯＢ
・選手			
ＧＫ	岡部　大	（明　治）	182cm
	酒谷　信彦	（金沢工大）	179
	小松伊佐夫	（中　央）	180
ＦＰ	関　健三	（中　央）	180
	西窪　勝広	（中　央）	177
	坪子　義明	（中　央）	171
	長野　透	（中　央）	176
	鈴木　健文	（早　稲　田）	175
	泉　喜久男	（早　稲　田）	174
	洞ケ瀬直幸	（早　稲　田）	181
	後川　一夫	（日　体）	180
	大西　和雄	（日　体）	168
	生駒　靖夫	（京都産大）	183
	北野　勝也	（京都産大）	166
	千葉　史信	（東北学院）	180
	勝地　文雄	（慶　応）	176

団長に中沢重夫氏

第7回世界学生選手権日本選手団々長に決まっていた田中秀夫氏（中大監督）は、健康状態がすぐれないため11月末に辞退、全日本学連では後任に中沢重夫氏（全日本学連理事長）を決めた。

☆★☆★☆★☆
海外トピックス

杉山茂
（NHK運動部）

2m15のGKが登場

ゴールポストの高さを、もちろん御存知でしょう。2m。

そこへ2m15のGKを立てたら……という〃夢〃のような話が現実に起きた。

西ドイツ全国リーグに加盟するOSC・ラインハウゼン(男)がこのほど身長2m15のGK、ディーター・バルック（20才）を登録した。フランスのスポーツ紙〃レ・キップ〃が伝えたもので、詳しいデータは、これ以外になく、読者の皆さんにぜひ写真をと手をつくしたが、今のところ入らない。訪独する全日本学生チームが、西ドイツでトップクラスのクラブと3～4試合を予定しているので、あるいは対戦も、と思われるが、このあと、どのようなニュースが伝わってくるか興味深い。

ちなみに、西ドイツ・ナショナル監督、V・ステンツェル氏は「非常に興味深い戦力だ」と、ナショナル入りをにおわせている。

ポルトガルが優勝
世界選手権Cグループ

A、B、C3ランク制採用という新しいシステムによる第9回世界男子選手権のCグループが、はやくも11月26日から7日間、ポルトガルで行われた。

参加したのは、ヨーロッパの8ケ国で、2組の予選リーグのあと各組上位2国で決勝リーグを争った。

その結果、地元ポルトガルが有力とみられたスイス、オランダなどをおさえて優勝を飾った。

上位3ケ国が来春のBグループに進む。

▽予選リーグA組

オランダ 19―13 ベルギー
ポルトガル 43―7 イギリス
ポルトガル 21―15 ベルギー
オランダ 36―8 イギリス
ポルトガル 19（分）19 オランダ
ベルギー 21―17 イギリス

▽同B組

スイス 21―20 ファロー諸島
フィンランド 24―21 ルクセンブルグ
フィンランド 14―12 ファロー諸島
スイス 22―11 ルクセンブルグ
スイス 21―14 フィンランド
ファロー諸島 27―23 ルクセンブルグ

▽5～8位決定リーグ

ルクセンブルグ 18―15 ベルギー
ファロー諸島 28―17 イギリス
ルクセンブルグ 26―7 イギリス
ベルギー 25―24 ファロー諸島

ベルギー×イギリス、ルクセンブルグ×ファロー諸島の2試合は予選リーグの記録を適用

【順位】⑤ルクセンブルグ⑥ベルギー⑦ファロー諸島⑧イギリス

▽決勝リーグ

		前半	後半		
オランダ	16	8―10	8―5	15	スイス
ポルトガル	26	10―12	16―9	21	フィンランド
ポルトガル	20	20―6	8―9	15	スイス
フィンランド	22	14―10	8―11	21	オランダ

ポルトガル×オランダ、スイス×フィンランドの2試合は予選リーグの記録を適用

【順位】①ポルトガル②オランダ③スイス④フィンランド

▽　▽　▽

IHF(国際ハンドボール連盟)は、来年2月25日から3月6日までオーストリアで行われる第9回世界男子選手権Bグループ予選リーグの組み分け（4組）を次のように発表した。Bグループの上位6ケ国が、53年2月デンマークでのAグループに進出する。

▽1組　チェコ、ブルガリア、スイス
▽2組　スウェーデン、フランス、オーストリア
▽3組　東ドイツ、アイスランド、ポルトガル
▽4組　スペイン、ノルウェー、オランダ

フランス、中国で6戦全勝

フランス男子ナショナルは、11月18日から12月1日まで中国に遠征し、北京、上海などで6試合を行い、全勝した。

フランスは、世界のBクラスの下といわれ、これまで訪中したユーゴ（ナショナル）、ルーマニア（チミソアラ工学学院大学）とはちがい、日本の実力と似かよったものがあるだけに、注目されていたが、スコアだけの印象では、かっての実力まで、まだ盛り返していないようである。このシリーズに動員された観衆は延べ七万人と伝えられる。

		前半	後半		
フランス	24	13―10	11―9	19	中国
フランス	28	12―9	16―10	19	中国
フランス	25	11―6	14―13	19	上海選抜
フランス	29	14―16	15―4	20	広東選抜
フランス	18	8―8	10―7	15	上海選抜

（注）1試合不明

3年目迎える「山口(兵庫県西宮市)少年ハンドボールスクール」

太田　正義

読者の皆さんは「少年ハンドボールスクール」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。

現在、私は山口(西宮市)少年ハンドボールスクールを教えている仲間の一人です。

このスクールが生まれたきっかけは、ちょうど昭和49年が三田学園ハンドボール部創設25周年にあたり、その記念事業の一つとして三田市(兵庫)を〝ハンドボール・タウン〟にするためには、まずチビッ子からという主旨で、三田市少年ハンドボールスクールが生まれ、しばらくして山口町にも発足したのです。

私たちのスクールは、小学校1年生〜6年生を対象にして2週間に一度、日曜日の午後約2時間を活動しています。低学生の場合、練習と云うよりも遊戯という感じで高学年とは別のコート、指導者もおこったり、なだめたり、賞めたりの百面相です。

それでも、高学年級で1年間も経つと、GKをつとめる指導者でも捕れないような立派なジャンプシュートや、サイドシュートを射ち、我々を喜ばせます。また、それ以上に嬉しいのは、我々の町では、ハンドボールという言葉が野球やバレーボールに肩を並べて、大人の人たちが知っていることです。

しかし、悩みもあります。他のスポーツが簡単に練習試合が出来るのに、ハンドボールはそうした機会に恵れず、〝生徒〟たちの要望に応えてやれないことです。

小学生だから対外試合は必要ないといってしまえば、それまでですが、勝ち負けよりも、知らない土地の子供たちとハンドボールを通じて友人をつくれることは、とても素晴しいと思うのです。

山口少年スクールが生まれて3年になりますが、この活力が現在までに至った要素をまとめてみますと、第一に「熱心な指導者のグループがいたこと(一人の努力、情熱だけではダメ)」、第二に「西宮市が社会体育に熱心で、ある程度予算化していること」、第三に「2週間に一度という無理のないスケジュールであること」、第四に「兵庫協会の理解を得て、東ドイツ戦神戸大会の前座試合に出場したこと」などがあげられます。

また、三田市のスクールの指導者として親しまれていた穂積豊彦君(湧永薬品)が、モントリオールオリンピック代表に選ばれたことは、父兄たちの注目を集めるのにプラスしています。

各地にハンドボールスクールが生まれ、そこを巣立つ人が全国で多くなれば、日本ハンドボール界も、本当の底辺拡大が実現すると思います。

(投稿・西宮市山口町)

各地の記録

男子で大きな波乱

▼第16回秋田県総合室内選手権（11月・大曲仙北圏民体育館）

▽男子準々決勝
大曲農高 25—15 秋田教員
湯沢ク 11—9 大曲高
大農ク 21—6 農業短大
大曲東高 13（延）12 湯沢高

▽同準決勝
大曲農高 13—9 湯沢ク
大農ク 14—11 大曲東高

▽同決勝
大農ク 17（11—6・6—8）14 大曲農高

▽女子準々決勝
和洋女高 22—1 六郷高B
大曲高 8—7 大曲農高
六郷高 12—7 大曲東高
大曲農高B 12—3 全和洋

▽同準決勝
和洋女高 9—1 大曲高
大曲農高B 9—5 六郷高

▽同決勝
和洋女高 11（8—2・3—1）3 大曲農高B

○……男子15、女子8チームが参加。男子は優勝候補筆頭の秋田教員が大曲農高（新人チーム）に準々決勝で敗れる番狂せがあった。決勝は余勢をかった大曲農高と、同校3年を加えたOBチーム（大農ク）の顔合せから、先輩勢が力で若手をねじ伏せ、初優勝した。女子は、和洋女高現役が抜群。

H・HC、教員破る

▼富山県秋季選手権（11月・有磯高）＝男子のみ

▽1回戦
想球会 19—18 八尾OB

▽準決勝
富山教員 30—20 想球会
H・HC 23—18 富山大

▽決勝
H・HC 23（10—8・13—10）18 富山教員

飯南、部創立以来の初優勝

▼島根県高校新人大会（11月・松江工高）

▽男子準々決勝
浜田水産 13（延）10 松江南
飯南 27—4 江ノ川
松江農 26—8 羽須美
松江工 26—5 松江商

▽同準決勝
飯南 20—10 浜田水産
松江工 19—13 松江農

▽同3位決定戦
浜田水産 13—10 松江農

▽同決勝
飯南 16（9—5・7—7）12 松江工

▽女子予選リーグA組順位①浜田商②松江農③松江家政
▽同B組①松江南②松江市女③松江商

▽同3位決定戦
松江農 10（延）5 松江市女

▽同決勝
浜田商 8（3—3・5—0）3 松江南

琉球大、沖縄国大かわす

▼第12回沖縄県総合選手権（12月）

▽男子準々決勝
沖縄教員 18—16 沖縄工高
沖縄国大 16—12 前原高
琉球大 24—10 沖縄イーグルス
興南高 11—9 大知会

▽同準決勝
沖縄国大 19—14 沖縄教員
琉球大 21—12 興南高

▽同決勝
琉球大 17（6—7・11—7）14 沖縄国大

▽女子準々決勝
小禄OG 9—2 知会高
興南高 7—1 浦添ク
浦添高 10—8 興南OG
浦添商高 13—5 島尻ク

▽同準決勝
小禄OG 8—4 興南高
浦添商高 7—6 浦添高

▽同決勝
小禄OG 11（5—3・6—4）7 浦添商高

御坊商工、男女制覇は成らず

▼和歌山県高校新人大会（11月・御坊商工高）

▽男子準々決勝
県和歌山商 16—6 桐蔭
那賀 8—4 耐久
御坊商工 18—2 粉河
市和歌山商 23—4 箕島

▽同準決勝
県和歌山商 9—5 那賀
御坊商工 13—6 市和歌山商

▽同決勝
県和歌山商 6（1—0・0—0：1—2・4—3）5 御坊商工

▽女子準々決勝
粉河 9—3 箕島
県和歌山商 7—0 耐久
御坊商工 8—1 笠田
新宮 8—5 那賀

▽同準決勝
粉河 12—4 新宮
御坊商工 8—2 県和歌山商

▽同決勝
御坊商工 6（2—1・4—3）4 粉河

柏崎工、柏崎降す

▼新潟県高校新人大会（12月・新潟江南高）

▽男子1回戦（1試合）
巻 11—4 中条工

▽同準決勝
柏崎 10—9 中越
柏崎工 24—7 巻

▽同決勝
柏崎工 13（6—3・7—4）7 柏崎

▽女子決勝リーグ
巻 5—4 新潟明訓
新潟江南 8—3 新潟明訓
新潟江南 6—1 巻
【順位】①新潟江南②巻③新潟明訓

男子は修道が優勝

▼広島県高校新人大会（11月・広高）

▽男子準々決勝
修　道 25−7 三次工
宮　原 11−4 城　北
呉　工 11−7 山　陽
呉　港 8−4 広

▽同準決勝
修　道 10−5 宮　原
呉　港 7−5 呉　工

▽同決勝
修　道 12−7 呉　港

▽女子準々決勝
広島一女商 13−6 戸手商
山陽女 23−1 尾　道
比治山 16−3 賀　茂
進　徳 10−5 宮　原

▽同準決勝
山陽女 19−3 広島一女商
比治山 4−3 進　徳

▽同決勝
山陽女 15−1 比治山

松任、延長で金商降す

▼石川県高校新人大会（11月・小松市体育館）

▽男子決勝トーナメント1回戦
小松工 13−6 泉ケ丘
小　松 24−9 北陸大谷
県　工 16−9 大聖寺
寺　井 12−4 二　水

▽同準決勝
小松工 10−8 小　松
寺　井 15−2 県　工

▽同決勝
小松工 10（4−2 6−3）5 寺　井

▽女子準決勝
松　任 7−4 津　幡
金沢商 7−3 星　稜

▽同決勝
松　任 7（2−0 2−4 … 1−0 2−0）4 金沢商

金沢市役所、圧倒的な強さ

▼石川県実業団・クラブ選手権（11月・石川県体育館）＝男子のみ

▽実業団の部・準決勝
金沢市役所B 18−12 小松製作所
金沢市役所 33−5 石川教員

▽同決勝
金沢市役所 31（13−10 18−10）20 金沢市役所B

▽クラブの部・準決勝
あすなろク 24−11 小松ク
県工ク　棄権　七尾ク

▽同決勝
あすなろク 25（9−3 16−3）6 県工ク

女子は武生商に栄冠

▼福井県高校新人大会（11月・羽水高校体育館）

▽男子決勝トーナメント1回戦
若　狭 10−6 武　生
北　陸 14−5 武生商

▽同準決勝
科学技術 4−3 若　狭
武生商 5−4 羽　水

▽同決勝
武生商 14（6−3 8−4）7 科学技術

▽女子決勝トーナメント1回戦
武生商 11−3 藤　島
仁愛女 5−0 羽　水

▽同決勝
武生商 5（2−2 3−1）3 仁愛女

佐賀農と神埼農が快勝

▼第8回佐賀県高校新人大会（11月・神埼農高）

▽男子1回戦（2試合）
佐賀農 16−12 佐賀西
佐賀商 12−7 神埼農

▽同準決勝
佐賀農 16−9 神　埼
佐賀東 8−1 佐賀商

▽同決勝
佐賀農 18（8−5 10−5）10 佐賀東

▽女子決勝リーグ
神埼農 20−0 嬉野商
神埼農 11−3 佐賀東
佐賀東 10−9 嬉野商

【順位】①神埼農②佐賀東③嬉野商

▼第25回宮城県新人大会（11月・古川高）

▽男子決勝トーナメント準々決勝
仙　台 16−10 向　山
古　川 18−4 筑　館
仙台育英 13−4 古川工
仙台二 13−6 仙台三

▽同準決勝
仙　台 10−7 古　川
仙台二 14−12 仙台育英

▽同3位決定戦
仙台育英 9−8 古　川

▽同決勝
仙　台 15（11−6 4−7）13 仙台二

▽女子決勝トーナメント1回戦
塩釜女 6−3 宮二女
飯野川 8−4 仙台女商

▽同準決勝
涌　谷 4−3 塩釜女
古川商 5−4 飯野川

▽同3位決定戦
塩釜女 6−5 飯野川

▽同決勝
涌　谷 11（5−0 6−1）1 古川商

▼宮城県男子選手権（12月）

▽準々決勝
東北学院大 33−8 東北学院工学部
宮城教員 20−19 白虹会
育英ク 16−11 全仙台大
北陵会 12−11 東北工大

▽準決勝
東北学院大 22−11 宮城教員
育英ク 20−14 北陵会

▽決勝
東北学院大 23（12−5 11−1）6 育英ク

◇おことわり　今月号は特別発行のため、年間11回予定の「協賛広告」は掲載いたしておりませんので、提供主、取り扱い協会各位にはご了承下さい。

★編集後記★

□……明けましておめでとうございます。ことしも＜ハンドボール＞誌をごひいきに。

□……いわゆる正月号を発行したのは初めてです。

全日本総合の活気が、いつもより、少しは早く皆さまに伝わるハズです。

しかし、多忙な年末に、平常のページ建てを守ることは難しく、この分、来号の〝記録特集号〟で埋め合わさせていただきます。

はや、今年は世界選手権のアジア予選（今秋？）。流れの速さに対応できるシステムを一日でも早く造らねばなりますまい。（杉山）

□……全日本総合最終日の男女決勝、ハンドボールの試合であれほど沸いた場内はそうないと思います。

やはり観客と選手が一体となる――それがスポーツの醍醐味であると痛感しました。

□……今年も日本リーグなど数多くの試合が各地で行なわれますが、皆様もぜひ会場へ足を運んで応援して下さい。

□……機関誌に関する御意見、御希望なども今年はどしどしお願いします。

今年もどうぞよろしく。（青木）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一四九号
昭和四十年六月七 第三種郵便物認可
昭和五一年十二月二十五日印刷 昭和五二年一月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
渋谷区神南一－一－一
大代表(467)三一一一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
特価百八十円 (年間購読料二千七百円)